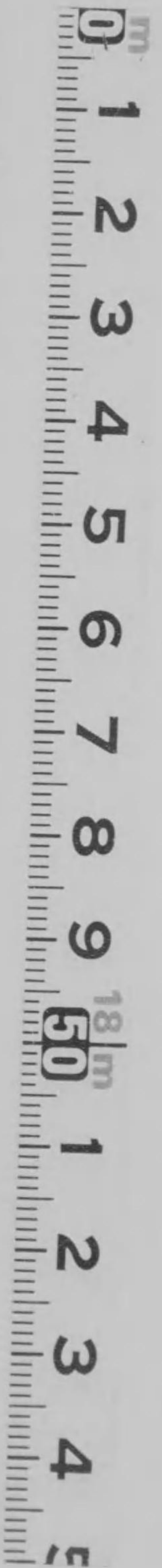


388
144



始



388-144



奮

闘



序

古より絶大の事業を爲し絶世の偉功を奏したる人を見るに、未だ曾つて奇策妙法のおつた譯でなく、又初めより大才英智の人でもなく、凡人凡質凡才凡智の人にして、善く偉業を成し遂げ得たるの所以を考ふるに、唯だ夫れ己れを信するの鞏固にも、勇猛邁進、百折撓まず、干挫屈せず、側目も振らずして奮闘努力したるに因るのである、功は敢て急ぐを要するものにあらず、龜の歩むこと遅々たるも、終には兎の疾きに勝てるの俗諺は善く其の實を得たるものと云はればならぬ一言以て序とすこ爾云。

大正七年六月

著者識

青年努力 此奮闘目次

▲奮闘の根抵此に在り……………一

○業務の中に於て尊い意味を見出せ……………一

○満身の精力をこめて働け……………六

○總て比較の觀念を忘るゝな……………九

○所謂善美一致の境を味ふ……………一六

○最も力ある自然的敎訓……………二〇

○青年は新思想にかぶれ易し……………二四

- ◎ 社会的政策としての矯正方法……………三三
- ◎ 現代青年の覺悟……………三七
- ◎ 青年に望む此の精神的統一を！……………四一
- ◎ 新教育を受けたる者の缺陷……………四六
- ◎ 青年の深く注意すべき事項……………五〇
- ▲ 特に望む地方青年の奮闘的改善策……………五五
- ◎ 地方青年の就職策……………五五
- ◎ 積極的救済設備の必要……………六一

- ◎ 交通と金融機關の設備……………六〇
- ◎ 交通至便の普及……………六九
- ◎ 人物の採用と生活費の低減……………七四
- ◎ 文化的設備の勵行……………七九
- ◎ 果して如何なる點に改良すべき？……………八三
- ◎ 地方改良の根本義は是？……………八七
- ◎ 自治的精心の涵養……………九一
- ◎ 自治的公共心の涵養……………九五
- ◎ 自治の本義を知れ……………九九

◎國家と自治体との關係……………一〇四

▲特に地方青年は此點に鑑みよ……………一〇八

◎此の點に改善を加へよ……………一〇八

◎營業者及び青年の留意すべき點……………一二三

◎地方不振の因爰にあり……………一二七

◎斯くして勤勉正直なる民たらしむ……………一二五

◎生産物需給の現状如何……………一三〇

◎産業振興に努力せよ……………一三九

◎青年の覺醒爰にあり……………一四四

◎此の責任果して何人にありや……………一五〇

◎農村の責實に此にあり……………一五四

▲自覺したる青年奮闘の地……………一五八

◎是れ即ち所謂冒險的の職業か……………一五六

◎醒めたる青年活動の天地……………一六五

◎須らく新領土の經營を望む……………一七二

◎西歐に於ける殖民熱勃興に鑑みよ……………一七六

◎彼の所謂内地殖民政策……………一八〇

◎私營内地殖民の成績……………一八五

◎須らく此の意義ある生活を撰べ……………一八八

◎都會と田舎との關係……………一九三

◎都會は地方に養はる……………二〇〇

▲是れ奮闘的青年の一大問題？……………二〇八

◎一切の物皆悉く成功を欲す……………二〇八

◎自ら大ならんとするの欲望……………二二二

◎所謂一知半解耳……………二二五

◎欲望は道德の基礎？……………二三〇

◎自然主義にも此の眞理あり……………二三七

◎新道德、新宗教……………二三三

◎如何にして吾人は成功せん？……………二三九

◎第一に擧ぐべき成功の道……………二四四

◎成功し得るの性格……………二四七

◎成功し得る性格の二……………二五六

◎成功の弊此に在り……………二六二

目

次

(終)

◎飽く迄奮闘し、努力せよ……………三〇〇

◎人間の爲すべき最善最大の事業……………二六五

◎眞に人としての成功……………二六八

▲精力と努力と奮闘……………二七一

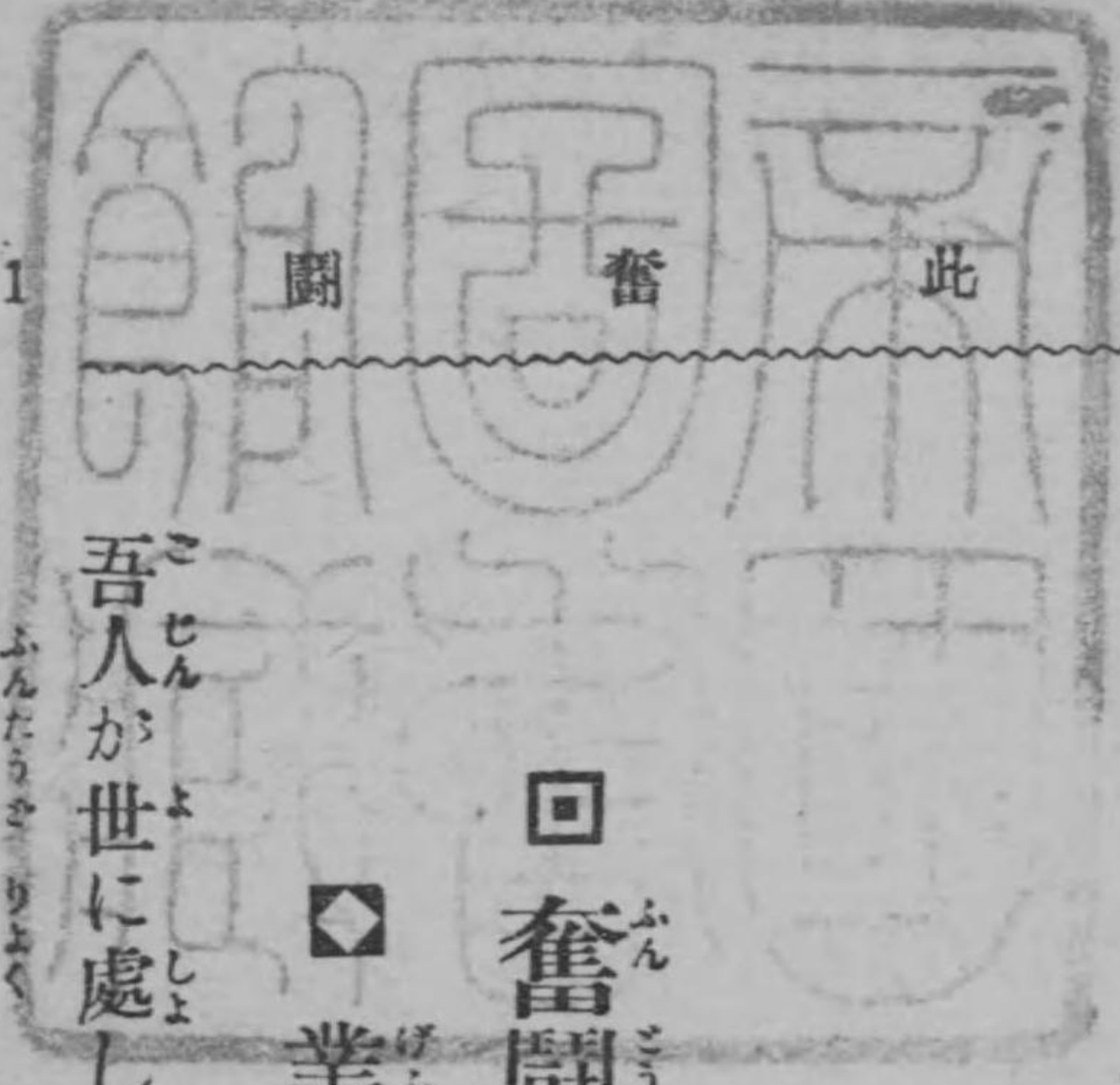
◎精力消耗の失敗……………二七三

◎カーネーギ氏の精力觀、落伍者の告白……………二七六

◎現代は精力集注奮闘努力の時代也……………二八一

◎精力利用は如何にすべき？……………二八三

◎此策達は蓋し當然耳……………二九四



青年
努力

此この

奮ふん

闘たう

奮闘の根抵此に在り！

業務の中に於る尊い意味を見出せ

吾人が世に處して成功せんと欲するならば、各自の目的に向つて奮闘努力せねばならぬのであるが、夫れと同時に先づ修養

法學士 金子淡堂
日本法學士 高橋北堂 共著



を積んで心身の鍛錬を容れねばならぬのである、故に吾人は此意味に於て爰に先づ奮闘に先つて青年の修養に關して大体を述べんと思ふのであつて、之れに關し先づ先輩の意見を叙して、参考に供することゝする、東洋大學の高島氏は曰く、近來一般の人々が自覺して來て修養に努める様になつて來たのは、國家の爲めに誠に喜ぶべきことである、されど修養を誤解して特別に書を讀み講義を聽かねば修養でないと思つて、地方青年は之れが爲めに自己の職業迄も疎かにするが如き傾向があつたならば、それは大なる間違ひと云はねばならぬのである、余は斯る

傾向をもつて居る二三の青年を知つて居るのであるが、彼等は精神の修養を説くと云つて只だ静座したり、禪書を讀んだりして居るのである、斯くして如何に無念無想になつたと云つても亦如何に精神が落付くと云つても、自己のとる處の職業迄も放擲するならば、個人にとつても國家社會に取つても用を爲さないのみならず、害あつて益がないものである、眞の修養は決して此等の静坐或は禪書を讀む等のみに有するものではないのである。

寧ろ各自のとれる職業の中に修養の法を見出さねばならぬの

であつて、その法は種々とあるのであるも、最も大切とすべきものは左の諸點にあるのである。

第一、自己の職業を尊敬すること。

古來宗教家や道德家が敬と云ふことを主として教へたのは決して偶然でないのである、これを人に應用し神佛に應用するなれば、有り難いと云ふ感應の念となる、人に若し之の敬と云ふ真心の念がなかつたならば、如何に特別の修養法を積んでも、必ずや是れ無用の長物となつて了ふのである。

然るに地方の青年にして農家に生れたるものが、往々として

父祖の農業を營むと云ふことを以て、一種の侮辱かの如く感じて、餘儀なく農業を營むと云ふ様なものが、無きにしもあらざるのであるが、斯る考へを以て 業を營んで行くやうでは、假へ他の修養を講じても無効となるのである、人生に必要な職業であるなれば、其の業の如何を問はず、業務の中に尊い意味を見出すことが出来る、殊に農業の如く古來尊んだ職業の中には、從來殆んど人の氣づかない尊い意味が含まれて居るのである。

◆ 満身の精力をこめて働け

農業を営む人は勿論のこと、苟しくも國家を思ひ人生を思ふものは、自己の職業を重んずると共に、農業に對しては充分なる尊敬を拂はねばならぬのである。この職業を尊敬して従事する心その物が、實に是れ尊い修養であつて、忠義心と孝心も皆な働きを同ふするものである、何となれば農業に従事する處のものが、専心一意これに勤めて毫も二心なきと云ふことは、やがて是れ忠の眞髓である。

忠はすべて是れ自分の一心を一事に献げるの心であつて、これを君に仕へる道に用ゐらるゝに至つたのである、けれども萬事に此の心がなかつたならば、事の成功する理由はないのである、又その職業を尊敬して丁寧に親切に作物に對して、その他の手入にとめると云ふことは、丁度親を思つていたはると同じ心である、故に地方に於ける青年は田の草をとり、或は又其の畑を耕すに於ても、優に其の忠孝の精神を養ふことが出来るのである、すべて事をなす時に仕事と一つになると云ふことが即ち是れ修養の秘訣であるのであるが、農業家が熱心に稲や麥

を作つて、それらのものと自分が一つとなつて、これを耕す時には毫も他の事を考ふることなく、晴雨に拘はらず、風霜に關せず、恰も自己の身を愛するが如くにそれらを愛したなれば、是れ禪の修養に於ける無念無想の境であつて、天地と一味になつた時の境遇と同じことである。

故に地方に於ける青年者が、機會あり又事情が許して何等かの修養法に努めると云ふことは、大に嘉すべきことであるけれども、寧ろ自己の職業そのものを直に自己の修養の働とするに努めねばならぬのである。

第二、職業を尊敬して之に注意して反省せねばならぬこと。

反省と云ふことを怠つたならば、決して効果を擧ぐることは出来ぬのである。熱心に草をとり、熱心に耕すと云ふことが、何が故に忠孝と同じ精神となるかと云ふことも、反省に依つて始めて悟り得るのである、又自分でなしつゝ、あることについてその善は益々進めてその悪は改めると云ふが如き事柄も、亦反省に依つて出来るのである、即ち農業は自ら種々なる経験を積み、或は人の経験を聞きて之れを實際に試みて、常にその結果を考へて益々進歩發達を考へねばならぬのである。

これ亦實に反省の賜であつて、若し事をなしても反省なしに漠然として行つたならば、毫も進歩し發達することは出来ぬのである、故に仕事を爲す時に於ては滿身に精力をこめて之に當ると共に、その結果については常に十分なる省察を加へて、改良進歩を計らねばならぬのである。

◆ 總て比較の觀念を忘るゝな！

第三、比較と云ふことを忘らざること。

如何に物に熱心であつても他に比較せずして、つまらない者

を捉へて、これが無上の物と信じて行ふやうでは、必ずや其の勞して效なきに終るのである、故に自己の執る處のことは常に他の地方や、或は又他の人の執るところと比較して、能くその長短を判断せねばならぬのである、近頃一般に共進會や獎勵會の設けがあつて、農産物其他の品評をすると云ふことは、最も是れ喜ぶべき現象であつて、比較に依つては爰に其の進歩發達を促すこと、なるのである。

されば斯る機會を利用して自己の職業の缺點や、短所を見出すに勉めて、之れを見出すに於ては改めて他の長所をとり、益

々修養してその美點を發揮せねばならぬのである、されど人は自己より劣れるものに比較したならば、自己の優れることを悟つて愉快であるが、優つたものに比較したならば、反對に不快を感じるものであるから、常に自己以下のものに比較して之れに安んずると云ふが如き傾向があるものである、是れ即ち小成に安んじて心を硬くして、進歩發達せざる根本であるのである、されば常に自己の業をより高いものに比較して、益々進歩に勤めねばならぬのである。

以上は獨り農業に限ることなく、一般の職業にも共通する處

の修養方法であるが、先づ此の三條件に注意したらんには、如何なる職業のものと雖も、所謂修養が出來、向上しないと云ふことはないのである、併し爰に特に農業が人格「修養の上に尊い意味を有する特別の點を擧げたならば、第一には農業は大自然を相手にするのであるから、到底人為の胡魔化して用ゆることは出來ぬのであつて、商業の如きは假へ永遠には勝を制せざるとするも、胡魔化をした爲めに目前の利を得ることもあるが、大自然は所謂至誠無思であるから、如何なる狡猾な者も之を胡魔化すことは出來ぬのである。

斯る一般的確實性を有する、大自然を君とし、親とし、師とし、友として働いて居る農業家は、如何にも幸福と云はねばならぬのである、されば眞に農業を尊重して之れに勤むると云ふことは、決して胡魔化しをする人にはなれぬ筈である、正當の職業はすべて尊いものであるが、斯かる尊い意味を有する職業は他になからうと思ふのである。

斯くの如く胡魔化をせず至誠無思を以て事を成し行く人々は今日の我が國に於て最も要求する處の人であつて、所謂國家の大寶である、今日の如く商業の進歩は誠に喜ぶべきものである

が、これと共に之等の職業に胡魔化し易い弊風の吹き荒ぶのは誠に憂ふべきこと、云はねばならぬ、農業家の如き至誠堅實なる心を養ふに於て、最も適する位地に居る人が、毅然として此等の弊風に當るの覺悟を要するのである。

余は古來の輕薄なる惡傾向のみに見る時に於ては、斯くの如くにして我が國は何故に亡びざるやを怪しむこともあるが、併し斯る惡傾向は都會の一部に止まつて、田園生活を營むもの、間には、至誠堅實の風が充分に活動して居るからである、自分等は屢々地方僻村の村落を視察してこの感を深くし、衷心から誠

實なる農業家に對して、尊敬感謝の念を禁じ得ないものである

所謂善美一致の境を味ふ

第四、農業は秩序を要するの職業である。

農業は如何に焦つても抜けかけの功名や、一夜漬の仕事は爲し得ることが出来ぬのである、必ず次第順序を追ふて一段一段と進まねばならぬのである、事實の成功に於て是れ程の堅實の法はないのであつて、書生が學問を修むるにも、一夜づくりの間に合はさうと云ふものは、後に至つて得て躓くが、農業家の

とるが如く秩序を追つて次第に勉強を積み、最も堅實にして轉輾の恐れはないのである、これも亦今日の我が國の弊風に對しては無上の教訓であつて、農業家は不知不識の間に我が國今日之の弊を救ふ堅實なる品性を養つて居るのである。

第五、農業は忍耐を要する職業である。

固より忍耐には種々あつて一時的の急激なる困苦を凌がねばならぬこともあり、或は長き間に絶えず急激ならざる困苦に打ち勝たねばならぬものもあるが、農業の如きは即ち後者に屬するものであつて、是れ我が國人の氣質の短を救ふの適當である

即ち我が國人は永續した忍耐には最も不得意であるが、農業の如きは此の心なければ到底結果は得ぬのであるから又修養上に大切なるものである。

第六、趣味を養ふこと。

農業によつて趣味を養ふことが出来る人は修養につとめとる云つてたゞ狭い道德的のことにのみにては足りない、その間に於て樂天地を見出し、之を味ひ之を樂しむ優美の心がなくてはならぬのである、趣味には多くの種類があつて、美術を愛するも趣味、また大自然の中より美を認めて之れを味ふも趣味であ

る、人工の美貴ふべしと雖も、その原くところは自然の美である、人は長へにこの趣味を失つてはならぬのである。

然るに農民の如く晨に星を戴いて出で、夕に月影を踏んで歸ると云ふが如く、終日大自然の間にあつて事を執るものは、少しく心を用ゐたなれば無限の情致は此の間より認ることが出来るのである、されば自己のとる處の職業そのものが趣味となるのであつて、所謂善美一致の境を味ふことが出来るのである世に職業と稱するものは極めて多いのであるが、斯る生涯を作るに便なるものは尠いのである、これを想へば農業家たるもの實

に愉快なるものと云はねばならぬのであるまいか。

□ 最も力ある自然的教訓

第七、農は心身の健全を進めるに最も大切の職業である。

およそ修養は精神の鍛錬のみならず同時に又身体の強壯が必要である、農業はよくこれを併せ得ることが出来るのであつてこれを人家稠密の都會に於て、有害なるバチルスを含んだ汚れたる空気を吸ひ、容易に自然の美觀に接せず、終日營々役々として私利を争つて居るものに比したならば、農民が新鮮なるオ

ブオレに満ちたる大氣を呼吸して、美はしき自然の處にあつて自由の行動を執るは實に清福で、その心身に對する影響の如何は云ふ迄もないことである。

第八、農業は最も自治自得の精神を養ふに適す。

この精神的ほど我が國の今日に於て必要なるものは尠ないものであつてこの精神は之れを實現するといふことが實に今日の忠孝である、今日我が叡聖なる、天皇陛下は、國民の參政に權を賜りて立憲政治の國となつて、地方には自治の制度が布かれて居るのである。

然るに今日都會の多數のなす處を見るに、徒らに貧縁によつて事を成さんとするものが極めて多い、自己の力に依りて所謂自立自得の人となるものは殆んど少ないのである、即ち下は學窓にある處の學生より、上は紳士紳商に至る迄自己の實力に依りて、立てるものが果して幾人かある、斯の如きは單に自ら己れを耻かしむるもののみならず、亦自ら、陛下に對して不忠の臣なりと云はねばならぬ、然るに眞に農業を營む人は期せずして自治の人となり、眞に自得の人となるのである。

以上諸種の點より是れを見ても、農業は修養上に尊い教訓を

得るのである、之れを要するに農業は大自然を相手とする職業であるから、自己の品性を養ひ、人格を高むる上にはこれに増したるものはない、何となればウオブウオースも嘗て述べたるが如く、自然の教訓は古今の經驗の教へよりも、吾人に強い印象を與へる故にある、故に地方の農業に従事する處の青年は、紛々たる他の輕薄流者を羨まず、眞に自己の職を尊びて衷心から、満足の精神を以て従事したならば、是れ即ち無限の修養となるのである。

◆ 青年は新思想にかぶれ易し

清水博士は吾人に教へて曰く、青年は概して性情が感受性に富んで居るのであるから、所謂新思想なるものに感染し易い傾向があるのである、固より新思想その物は必ずしも悪いと云ふ譯ではないが、此等の新思潮の中には健全なるものあれば、又不健全なるものもあるものであつて、さてその根本に於て確固たる信念がないのである。

又その智識経験の修養時代にある處の青年は、新思想の是れ

善惡を明確に批判するの力に乏しい結果として、動もせば一も二もなく新奇を好むの念から、新思想にかぶれてその思想の渦中に陥つて仕舞ふと云ふ嫌ひがある、斯く青年が新思想に感染し易い状態は物に譬ふれば、恰もその病氣のその如きものである、即ち身体が健全であつたなれば、その病氣に對するの抵抗力が旺盛であつて、その病を驅除するの勢力を以て、その感染を防ぐことが出来るのであるが、さもないときは兎角病に犯され易いやふな状態で、ともすれば神經質的の傾向のみに陥つて仕舞ふのである。

のみならずその精神の堅固な信念のない處から、青年は動もすれば何物をかを捉へて、安心立命の工夫を凝らして、その心理のある要求に應せやうとして居るが、その宜しきを得ずして一も二もなく健否を辨別せずして、新思想に感染するの嫌ひがあるのであつて、その原因は固より種々あるけれども、一体に今日の修養は兎角く専門的になつて、他との連絡がとれない傾向があるのである。

例へば醫學にした處で内科は内科、外科は外科と個々分立の状況を呈出して、同じく内科の中にあつてもそれ／＼専門的に

分れて、その間の統一や連絡がとれて居ない弊がある、余は固より専門のものを非難するのではないが、一般常識を離れて他と没交渉の専門の弊に陥ることは喜ばしからぬ現象と云はねばならぬのである。

盲腸炎にかゝつて外科室に於て療治した人が、その手術を施された後に至つて非常に發熱をして、外科病室より更らに入院したと云ふことを聞いたが、その新たに入院したる原因は何處にあるかと聞くと、外科方面の診察では所謂外科の一面のみより見たる療治をしたもの、さて深く内科の方面に立入つて診

察がなかつた結果であると云ふことである。

専門智識の必要なることは云ふ迄もないことであるが、斯くの如く他と全く没交渉で所謂孤立の弊に陥ることは宜しくないことで、此等の現象は常に醫界に止まるのみならず、他方面に於ても専門孤立より來るところの弊は、皆異曲同巧の失態を演ずる譯になるのである。

尙ほ例を醫術にとると、専門孤立の弊に陥るの結果として、病氣が種々と縫れ合つた場合には、他と没交渉の純専門醫にかゝつた處で、連絡あり統一ある治療が覺束ないと云ふ所から、

患者の醫師に對する信仰の念は昔日とは頗るその趣きを異にして來たのである、従つて紅液の療法とか岡田式の療法とか、電氣療法とか催眠術療法と云ふ様なもの、現出するを見るに至つたのである、是れ全く溺れたる時には藁を据へよと云ふの筆鋒である、現代に於ける青年が新奇を追ふて之に迷ふの狀は、これに髣髴として居るのである。

要するに青年が徒らに新思潮なるものに自我を没却して仕舞ふと云ふ原因は、全くこの新思想なるもの、是非善惡を批評的に研究して、これを取捨撰擇することが出來ないからである。

而も青年をして斯くの如くなるに至らしめた背後には、近時の教育が前述したる如き、兎角く専門孤獨の弊に陥つて、學問と學問との間に連絡がついて居ない事情がある、例へば歴史は歴史、修身は修身、理科は理科、法制經濟は法制經濟と云つたやうな風に、各學科が離れかくに働かふと云ふ弊に陥つて居るから、將來の文明は一面に於て専門的に、一面に於て常識的にこの二者を調節して進歩すべき筈なるに、兎角く跛的に陥るの弊を馴致するに至つたのである。

昔日の所謂經史に依つて倫理道德の教授をし居た漢學時代に

於ては、四書を習ふにしてもその四書の中へは、修身、法律、政治、經濟、歴史と云ふ様に數多の學科が含蓄して、一面には倫理道德の學科を修養すると共に、一面には政治、經濟、歴史に關する智識を習得して、智育と德育と相並んで交渉と調和を保ちつゝ、進むと云ふ有様であつたのであるが、今日に至つて學校に於ても、智育と德育と体育とも鼎立して進み行くべき、方針をとれるにも拘はらず、どうも其の調和がとれて居らぬやうである。

◆ 社會的政策としての矯正方法

されば之れを匡救すべきの策としては、將來の教育を受くるものには、智徳を併行せしむるの工夫を凝らすと共に、今日のやうに既に神経質となつて居る、青年の矯正方法としては一方に於て、大に社會的教育を施すの必要があるのである、今日に於ける社會的事業は種々に發達して、地方に於ける行政も自治制も發達の方法をとつて、産業組合も起されると云ふ如き狀況であるが、社會的政策に至つては注意されて居ないのである。

故に此の教育と政策とを行ひ、又社會的制裁を盛んにしなければ、國家は健全に發達することが出來ぬのである、即ち學校教育はよいとしても、社會的制裁を嚴にしなければ健全なる發達進歩をしないのである、況して今日に於ける學校に於ける教育が不十分なりとせば、益々社會的の制裁を盛んにする必要があるのである。

彼の英國に於ける社會的制裁は極めて嚴肅で、幾ら知名の士であつても一朝其の人格に於て、非難すべき失態を演出したならば、その人は從來の立場を失つて社會から擯斥されると云ふ

姿となるのである、要するに一面に於て斯く英國の夫れの如くに、消極的に之を匡救するの制裁があると共に、一面に於ては積極的にこの方針を發展して、善事を推奨發達せしむるやうにして、健全なる進歩を爲さしめねばならぬのである。

それは果して如何にすべきかと云ふに、各地方なり各団体なりに健全なる中心人物を要するのである、これがなかつたならば決してうまく行かぬのである、古來地方には夫れく、長者なるものがあつて、能く郷黨を感化して地方風俗の上に好影響を及ぼした例は頗る多く、この中心人物がないと地方は盛んでな

い、今日に於てる地方に夫れく、代議士があつて、地方に於ける名望家たるには相違ないのであるが、種々の事情境遇から未だ風紀や思想の中心となつて、道徳上に盡すことを、今日の全議員に待つは六ヶ敷いのである、固より數多の議員中には此の理想的の人物もあるのであるが、事情境遇がこれを許さない點がある。

地方に於ける風紀事業は固より地味な仕事であるが、風紀の向上進歩を計るは極めて善い職分であるから、その職分の尊重なるを自覺して、地方に於ける名望家がこれに貢獻せられんこ

とを切望するのである、これと同時に内務省なり、文部省なりに於て大に地方に於ける風化の爲めに、一層貢献せる人物を奨勵表彰するの必要があると思ふのである。

ある一部に於ける論者は、現代の青年は自我的であつて、博愛の念に乏しく又身を殺して仁をなす、と云ふ些の犠牲的精神に缺くる處があると説くが、固より多少はこの傾向ありと云はれるが、一面に於ては新思想が消化しないで、現代思想の善と悪との差別もなく、是非を辨別せず容易に新思想に感染したるの結果、その思想が動搖して延いて思想界に懐疑の雲を惹き起

した爲めであるから、早く根本的信念を養成するが目下に於ける急務であると思ふのである。

◆ 現代青年の覺悟

貴族議員の江原素六氏曰く、國運の發展と云ふことは、能く何人も口にする處であるが、併しながら如何にして其の所言を實現せしむるかに就いては、各人皆それ／＼異様なる結論を爲して居る、自分は先づ正義の統一を圖るを以て慥かにその一方法なりと信するものである。

彼の戊申詔書に『日進の大勢に伴ひ、文明の惠澤を共にせん
 とする、固より内國の發展に須つ、戦後日尙ほ淺く、庶政益々
 更張を要す、宜しく上下心を一にし、忠實業に服し、勤儉産を
 治め、惟れ信、惟れ義、醇厚俗を爲し、華を去り、實に就き、
 荒怠相誡しめ、自彊息まざるべしとある、而も國民を擧げて文
 明の惠澤に浴せしめんとすることは是れ實に政令政策上の大な
 る問題である。

見よ文明の進歩は物價騰貴の問題を産み、貧富差等の悲隔を
 來さしめ、その惠澤に浴せしむるものよりも、寧ろ生活難の問

題の解決に苦しむものが多からしむるのである、先帝陛下は今
 日あることを豫め御軫念あらせられ給ひしことは、洵に恐懼す
 べき次第である、この詔書を拜誦するにつけても、吾人は大に
 努力する處があらねばならぬのである。

さて此の詔書の御趣旨を体し、それを實行せんとするには先
 づ庶政の更張を要するのである、即ち上下一心風俗醇厚なるを
 見るに至らば、國運は自ら發展すべきこと、秋毫も疑ふべから
 ざるものである、併しながら各自その位置、その境遇の異なるに
 よりて、その利害得失も亦一様でないので、單に上下一致と云

ふても、その完全なるを期することは實に容易でないのである。然れどもこれは不可能なることでない、自分は信じて疑はない處である、果して然らば如何なる方法に出づるか云ふに、前にも述べたるが如く正義の統一と云ふことに心を用ふるのである、若し夫れ國家をして圓滿に文明の域に達せしめんとするには、この正義の統一の外により多く優つた、理想的の方法を見出すことは難いのである。

そして又法律家の正義とする處のものは、教育家も宗教家も皆これを正義とし教育家や宗教家の正義とする處のものは、法律家もこれを正義とし、即ち正義の標準は何人に於ても皆相一致し、苟しくも相矛盾し相衝突することなきに至らねばならぬのである。

◆ 青年に望むる其の精神的統一を！

今日の状態を見るにこの所謂正義なるものは、殆んど形式的に統一されてある、併しながら未だ精神的には統一されて居ないものもあつて、自分の要望する處のものは、即ち精神的に統一を期することである、そしてこの缺陷を補ふの急務であるこ

とは、現下の問題たるを矢はぬのであつて、又世の教育家諸氏は大に關心留意すべきことであると思ふ、正義の統一に關して今こゝに二三の例法を擧げて見やう。

先年東京府下の府中において町長の選舉が行はれた、その際大多數を以て當選したのは貸坐敷の主人である、法律に依つて選舉し法律に依つて當選したのであるから、法律上完全なるものである、故に郡長は正義としてこれを知事に上申し、知事も亦正義として之を認可したのである、されば神官も僧侶も教員も町長として尊敬を拂はねばならぬのである。

併しながら理想的に之れる考ふるときは、正義の標準に於て各その見解を異にせねばならぬのである、即ち相矛盾し相衝突するの事實は、此の間に發見さるゝを遺憾とする、何となれば町長は一町に於ける首腦者である、而も町長は赤十字社、愛國婦人會、在郷軍人會、青年會、農會等の責任者であり、主宰者であつて一町の風紀を改善すべき人であるからである。

されば教育勸語や成申詔書の捧讀を爲すこともあり、殊に詔書中の勤儉産を治め、醇厚俗をなし、華を去り、實に就き、荒怠相誠しめ、自彊息まざるべし』と云ふ聖旨と、斯かる町長

の家業には全く相反するからである、のみならず貸座敷の主人に勅語又は詔書を捧讀されては、その權威を滅却されて仕舞ふのである。

神聖なる勅語もこれを捧讀するもの、人格如何によつては、その感化に大なる差異があるのである、それから行政實行に於ても往々正義の統一を缺くことがある、次にこゝに述べたいと思ふのは人格上の正義の不統一である。

彼の民法第八百三十九條に於ては推定の家督相續人たる男子ある者は、男子を養子と爲すことを得ず」と規定し、女子の爲

めには何等の規定のないことである、この民法の規定は取りも直さず日本舊來の家族制度として、貧民の子を養子として數十年間無給金を以て、奴隸的に使用するの陋弊を禁じたのである兎にも角にも民法の起草者は、男子の人格に付ては意を用ゐたのであるが、女子に之れを及ばさなかつたのは、上手の手から水が漏れたのであらう、この穴を知る市井の悪者は、二十人も三十人も養女を置いて、親權を以て醜業を強制し、暴利を貪りつゝ、あるのである。

斯くの如く男女間に於て、人權上不統一があるのである、假

令如何なる事情があるとしても、親權を以てその子女に不道德を強行せしむることは、絶対に許すべき筈のものでないのである、然るに我が國に於て斯の如き陋風を公許するは、大なる耻辱であるのであつて、吾々は大きに注意せねばならぬのである

◆ 新教育を受けたる者にこの缺陷

それから爰に最も注意せねばならぬことは、國運の發展と自治体との關係である、即ち自治体の良否は國運の發展と、大なる關係あることを忘れてはならぬのである、そして自治体の良

否は又、その議員の良否と相關するのである、ところが市區市町會議員は云ふ迄もなく、郡會議員、縣會議員、さては衆議院議員などの選舉場裡は、實に是れ腐敗の極に達して居るのである、所謂朽木は知るべからず、糞土の牆は汚すべからざるの類であらう。

斯る腐敗せる道德状態は古き教育を受けたるもののみでなく概して新らしき教育を受けたるものにあるのである、即ち忠孝主義に依つて訓育されたるものにあるのである、何故に斯くの如き惡結果を見るに至つたかと云ふことに就いては、我々は

に探究せねばならるのであるが、併しその原因結果は極めて簡
單なるものであつて、その責の一半を教育家に嫁するの當然な
るを思ふのである、自分は此等のことに就いて、今少しく詳細
にそして忌憚なく云つて見たいと思ふのである。

世には判檢事辯護士にして刑餘の身となるものがある、最も
名譽を重んずる各種の議員であつて、刑事上の罪人たる人もあ
る、それ等の事實は醫者の不養生と同一のことであつて、遺
憾なく正義の不統一を表示したる事實である、今試みに統計の
示す處を見るに、普通人の犯罪は一萬人に一人であつて、法學

社會の犯罪者は四百人に一人の割合となつて居るのである。

又各種階級議員の犯罪者は、五十人に一人の割合であると云
ふことである、此等の事實に就いて見れば、智的教育や物質的
教育のみでは、未だ以て國民の品性を向上せしむることは、頗
る困難であることが知ることが出来るのであつて、即ち知ると
行ふと云ふことはこれに依つて見るも全く別問題である、そこ
で國家が國家の目的を實現しつゝ、國民の福祉を増進せんと欲
せば、國民教育の力に俟たねばならぬのである、されば彼の孔
子も教へざる民を以て戰ふ、是れ之を棄つと云はれたのである

◆ 青年の深く注意すべき事項

若し夫れ教育の効績を完ふせんとするには、何うしても政治と宗教の力を籍らねばならぬ、苟しくも此の補助を要することを怠れてはならぬ、こゝに一例を挙げたならば、法律は概して積極主義のものである、如何なる法律でも國民發展の意味を含まぬものはないのである、そして國民の幸福を増進するには、教育の力のみにてはよくすること能はざることとは、敢て呶々を要せざる處である。

然るに宗教家の如きは法律によつて、未成年者の禁煙、禁酒を規定せんとするや、又一夫一婦制を設けんとするや、斯の如き問題は法律の力に俟つべきものでない、宜しく教育の功に待つべきものであると反對するのである、自分は此の反對は無益なることであつて法律の制裁と相一致してその目的を遂ぐることは、最も効果の多いことであると思ふ、斯くして法律が教育の効果を補助するが如く、宗教も亦教育と法律の効果を補助せねばならぬのである、こゝに始めて國民の幸福は完全に享受し得らるゝのである。

格言に曰く「肉によつて生るものは肉なり、靈によつて生るものは靈なり」と、されば宗教心なき教育の結果は、勢ひ保守的となり物質的となるを免れぬのである、そこで法律に就いて考ふるも、法律に對しては絶対に之れに服従し、先例に對しては専ら之れを選擧する性質のものであるから、何うしても自然に保守的となるのである、又物質的教育はこれ亦自己本位なる傾向が生ずるのである。

次に宗教は如何と云ふに概して神佛本位であつて、信念に依つて動作するものである、されば正しき動作は、履行せざるべ

からずとの、義務的に之れを行ふのではなく、その心中に潜む處の傾向は、吾々を刺戟して爲さざるべからざるのである、故に法律や教育に實行の生命を與ふるものは、此の宗教の力であつて、法律教育に進歩を與へ改善を與ふるものも亦、この宗教の力であることは云ふ迄もないのである。

そしてその改良も進歩も決してその団体や政体や、文化などと衝突するものでないのであつて、之れを要するに國家に對する教育の位置は、これを今空氣に比したならば、窒素の如くにその最大勢、最大部分を占めて居る、然るに窒素は決して有害

のものでない、たゞ酸素の分量の減じたるときに、不健康となるのである。

されば宗教家が社會上に於て窒素たらんとしても、それは到底出來るものではない如く、教育家が法律や宗教を全く排除して、その教化を完了せんとしてもそれは出來ぬことである、そこで教育に従事する人々は、宗教家の正義とすることろも能くこれを調べた上に、彼此相提携し相助長して、正義の統一を研究なし且つこれを期圖して、國民の福祉を増進するに努めねばならぬのである、世の青年は勿論、先進の士も大に深き注意を

この點に拂はねばならぬのである。

特に望む地方青年の奮闘的 地方改善策

地方青年の就職策

地方青年に付きては現時頗る忌むべき風潮が流れつゝ、あるのであつて、是れに就ては小林博士は次の如く語つて居る、近來都市の膨脹するに伴れて、地方の衰微は著しきを加へて來たがこれは何とかして今に相當なる救済策を講せざれば、地方村落の年々衰頹し、容易に挽回することが出來ぬ様になるであらう

併し資本と勞力とが都市にのみ集注して、地方に残つて居る土地と之に要する資本と勢力との割合の均衡を失ふことは、實に歐米文明各國を通じて一般の大勢であるが、その大勢と云ふのは産業革命の結果などで、これが爲めに一國の生産力を増し、貿易を振興する、効果は實に偉大なるものであるも、これが餘りに偏しでもするならば、一國の健全なる發達を阻害するものであるが、我が國では最近二回の大戦役によつて大に促進せられた感がある。

これは何故かと云ふに、戦役は常に都市の勃興と、地方の衰

微を促さしめるものであるからである、而して勞力は資本の往く所に追隨するものであれば、資本が既に少數の都市に集注すると、勞力も亦之に従つて少數の都市に集注せねばならぬこととなる、されば最近に於ける東京、大阪、神戸、名古屋などの人口が著しく増加を來して居る。

而して此等都市に於ける地價、地代から家賃及び物價の激騰は、その如何に地方勞力の集中して居るかを示すに足る、さればこの衰微を防止するには、是非とも地方を開展するの外策はないのである、故に地方の資産家は自ら地方に適する事業を起

し資産のないものはその親類知己などにより、或は共同の下に事業を起すことが最も必要である。

經世家は云ふ地方人は何も骨の折れる生活の困難な都會を目的として出かけるの要はない、都會に出で、學んだ青年とても出來得るだけは地方に歸りて仕事をして貰ひ度い、又一般に斯く心がけることが必要であると思ふ、併し一方より考ふれば此等の人物を、地方に使へと云つた處が、なすべきの仕事がなくては仕方がないのであるまいか。

都會に於ける資本と勞力の激甚の集注は、その反對に地方村

邑の衰微を促がし、農業勞力は減じて獨り農村の衰微を來すのみでなく、往昔は相當に繁榮して居つた地方驛邑なども、偶々鐵道の大停車場となつたところを除く外は、多數は實に今見る影もない有様となつて居る、故に如何に有爲の青年が輩出した處で、地方の村邑には之を容れる位置がなく、仕事もなく假し人はあつても人が適せないと云ふことになる。

それ故止むなく彼等の父兄は疲弊して居る家産を傾けて迄も青年の爲めに勉學せしめ、尋常、高等、中學の學科を経て都會に遊學の學資を貢いで居る、斯くして慘憺たる薄弱な後援に

よつて、都市を彷徨して居る青年の数は實に多數を極めて居るのである、併し幸にして此等青年有爲の輩が、其の幾部分學成つて都市に就職したからとて、郷里には何等の餘澤はなく、さればとて、郷里に歸つた處で何處にか彼等の錦衣を飾るべき地位があるであらうか。

況して彼等の望める學校もそれ／＼限りがあつて、度々落第するもの多く、一旦は地方に歸る、代數幾何學を知つて居た處で、地方産業には何等の効なく、各地に特色な織物とか其の他の製造業などには、更に適せぬことになつて、一種の不具者と

なつて居り、又幸に學を卒へた所で就職上の失落者となれば、地方父兄が投じた青年の學資が、概して不生産的の投資となるのである。

されば都市幾多の學校は地方のためには、不經濟的の機關となつて、社會は益々不健全なる要素を増加することとなる、故に自分は中學校よりも實業補習學校を完備した方がよいと思ふのである。

◆ 積極的救濟設備の必要

各府縣に於ける中學校は、凡そ三四校づゝはあるのであるが、斯く中學校があつてもそれから上る高等學校・大學には限りがあるれば、是非其前述の様な不具者を多く出さねばならぬから、各府縣に於ける中學校は二校位として、實業學校を多く設備したならば、態々東京迄も出でなくとも、地方に於て充分に學ぶことが出来るので、つまり補習、實業教育を地方にて充分に行ふと云ふことは、都會に出で、學ぶ學費を地方に止めて、生産的の投資とすることが出来るのである。

此等は實に朝野識者間に苦慮を仰ぐべき大問題であるが、其

の解決方法としては行政の改善に、地方人民の自奮及び當事者の助力によつて、地方開發救濟の手段を構するの外はあるまいと思ふ、然らば地方開發には如何なる方法に依るべきか、即ち最も地方の産業を開發して職業の増加を計り、これと共に地方に於ける幸福に慰安の途を増進せしめねばならぬのである。

今や我が國の事業を積極的に發達して來て居るのであるから、地方行政なども最早積極的に進まねばならぬ、さもなくば折角長足的に進歩を爲しかけた、國家的事業も其の効果を擧ぐることが出来ぬのみか、資本や勞力は益々都市に集中すること甚し

くなる、それ故に今後に於ては地方行政を積極的に進めて、一は國家的事業の効果を完全に擧げしめると共に、資本勢力の都市集中を防ぎ、以て地方に之を分散して地方の發達を計ることが必要である。

斯くして積極的行政としては經濟的設備 文化的設備救貧及び社會的設備等であるが、この經濟設備とは地方の幸福即ち産業及び交通設備も増進することであつて、文化的設備とは地方の無形の幸福を教育徳義的行政上に増進する設備で、又救貧及び社會的設備とは、經濟上の不平均に原因した有形無形の幸福

の缺陷を救済する設備と云つた様なものである。

されば地方行政の擧行する經濟的設備とは、地方道路、埠頭輕便鐵道、電氣及び馬車鐵道、瓦斯電氣及び水力供給設備から橋梁、倉庫、商品陳列所、地方旅館、公設貸附所、産物試製所其他産業改良獎勵の施設であつて、主として地方産物の製造から、交通、保存、改良、金融、販賣等を容易にして地方の富力を有形的に開發するが目的である。

交通と金融機關設備

斯くの如くであるから、一面に於てはその地方に事業を起さうとしても、その地方との交通と金融とが充分に發達して居らねば、何等事業をも起すことが出来ぬのである、それに従來は二十萬圓の會社と云へば、相當なる會社であつたのであるが、今日では百萬圓以上でなければ會社とは云へない位である。

處でこの會社の規模が小さい時代に生産する産額は甚だ少なく、従つてその販路も附近最寄の需要を目的として他縣から代價を吸取すると云ふ様な會社はいくらもない有様であるから、此等をして今度更らに規模を擴張せしめて産額を増加せしめ、

縣内の需要位に止めず他府縣まで之れを積出し、尙ほ進んでは海外にまで輸出する様に發達せしめねばならぬのである。

それにしては第一に地方の道路及び小交通機關を改良して、輕便鐵道を布設して幹線鐵道に連絡せしめ、村落との交通をして便ならぬ、村落物産をして大市場に出し得る様になし、同時に倉庫及び金融機關の助力に依つて、低利の資本を融通する様に計らねばならぬ、斯くすれば従來の事業を擴張すると共に、又其の地方に思はぬ事業の起ることとなる、即ち製粉等から煉瓦の製造、製紙業、毛織物業等其の他種々事業を企てるの運命

となるが故に、都市附近に高價なる原料を買入る、の不得策を敢てするよりも、地方に於て賃金の安くして萬事都會よりも安値であるから、工場を設ける策は甚だ都合がよいのである。

自分の見聞した海外國に於ても、大工場が地方に散在して、國際的商品が地方から直接に賣れ行くものが少くないので、これと同時に亦地方に於ける小工業及び家内工業も頗る發達し居るを見たるが、此等は全く地方交通及び金融機關の發達に依るのであるから、我が國の經濟組織も亦かくありたいと思ふのである、而して斯く進歩したならば、地方に於ても必ず事業が起

り、資本と勞力とが最も有利に需要せられて少くとも今日大都市集注の趨勢は、著しく之れを緩和し得ることが出来るのである。

◆ 交通至便の普及

斯く論ずるもの、經濟設備が、必らずしも公營に限るのではなくして、公益上公營の方が得策とし、倉庫や貸附所などを公設とするの外、民業として發達を期することが必要であるが、輕便鐵道などは地方に依つては、収支の償はぬ場合があるので

あるから、斯る場合には民業を保護して設立を促すなどもよく
又市政に餘裕があるなれば、市自ら之を建設するがよいのであ
る。

兎に角地方の市を中心として、附近に通ずる輕便鐵道によつ
て、交通運輸の便を助くることが大切である、若し市で建設し
ない場合に於ては、私設會社が各地に起つて地方の利益を獨占
し、或は一社にて數地方にて事業を起し、小數で獨占すること
にするので、これは現に我が國で既に事實が示されて居る處で
あるから、結局獨占は免れぬことと思ふ、故に成るべくは此等

を公營した方がよい。

輕便鐵道が地方の産業に與へる効果は多大であるけれども、
その民業と公營とによつては非常に差違がある、それは民業の
場合には運賃が不廉であるからと云つても、其の引下げを實行
さする譯にはならず、假へ引下げを命令したからとて算盤がどれ
なければそれ以上に引下げさすることは出来ぬ。

一處が之れに反して公營の場合に於ては事業に損失があつても
その目的が地方産業の發達振興を圖るのであるから引下げを實行
し得られ、又時によつては特別の割引をなさしめることが出来

る、それで一時は收支は償はぬとしても、他日に及んで利益を生ずるやうになれば、將來の爲め公營とした方が得策となるのである、要するに鐵道の布設は經營者の利益以外に交通を發達し、地方産業の開發を促がす利益は頗る多大なるものであつて鐵道の敷設は實に地方改良の急先鋒となるのであるから、一日も早く普及發達せしめねばならぬのである、それから地方道路の完全は最も必要であつて、今日まで運輸の便を缺いた爲めに起らなかつた事業も、道路の改善によつて發達するのである。處が我が國の現状でも動もすれば道路の改善を輕視される傾

きがあつて、道路の改良は産業の發達してから後に起り、それまでは放任されてるの傾があるのであるが、これではとても地方産業の發達を促すことは出来ぬのである、故に輕便鐵道を敷設すると共に、これと聯絡を保つ處の道路を改良して、地方産物の出入運搬を便にせねばならぬのである。而して生産物を市場に輸送し、倉庫に預けて預り證券を受取りそれを銀行に持參して資金の融通を受け、その融通金を以て更に肥料なり原料の仕入を爲し、耕作に製造する様にしたならば、事業は資本に應じて極めて圓滿に進行するのである、故

に地方産業を振興させる要件の主たるものは、交通機關と倉庫金融機關の三者を第一に具備せねばならぬのである。

◆ 人物の採用と生活費の低減

又その地方に電気、瓦斯、銀行、倉庫、水道とか其の他種々の事業を、その地方に於ける公共團體にて行ふことにせば、それ等の相當の役員人物を要することとなるのであるから、その補助機關としては職業紹介所の如きものを設け、事業家と資本家との連絡を爲して地方事業に便し、その役員等はその地方實

業學校出の人物に注意し、一面に於ては事業界に要する人員を尋ね、又は紹介して他縣人の入らない内に紹介するやうにするがよい。

又一般的に地方小都會の生活費も安くすることに努め、家賃、食料品其他野菜、魚類等を充分安くして労働者を優待するの途を圖れば、次第に大都會より小都會に集中して、その繁昌も來すやうになり、即ち中心點となるのであつて、それは多く農業の多忙時は工業が閑で、工業の多忙時は農業の閑と云ふ状態であるから小都會に近いものはその居村に歸ることが出來て、農

業と工業との期節を利用して一舉兩得に働くことが出来るのである、故に大都市への集中を防ぎ、且つ地方産業を開発して其の結果は、多量の産物を材料となし得るのである。

地方の小都會は村落と都會との宿次を爲し、何れも最初は農業本位が先になり、次に商工本位となつて居ることは疑ひなきことであるも、今や農業利は段々と減じて工業利は漸次に進み、農利減退の域に達して來るのである、而して今まで日本の都會は農村に從屬して居るので、工業も亦農業に從屬することになつて居るから、その當時は商工業品は内に向ひ、即ち重

なる販路が地方に向つて居たのであつたが、今度は商工業品が外國に向ふ様になり、貿易は爲めに發達することとなつて、工業の原料は農業の副業より起るのであつて、爲めに農村は盛んとなり米と副業の養蠶、野菜類其他の收入が半を占めることとなるのである。

爰に於てか農業は遂に工業に從屬することとなつた、米麥の生産高が増加するの割合に、貿易品は多大の増加を來して居る彼の日清戰役當時に於ては輸出入額二億であつたものが、今日では十億餘からとなつて居るが、米麥の増加がこの割合に發達

して居るかどうか、養蠶は長野其他福島から今や全国に涉つて進歩して居ると見て、人は米は五千萬石で十億にもなるが故に大切であると言ふけれども、これは我が國人に於て必ず食はねばならぬものであつて益することは出来ないものである。

又これがなかつた時には補ふことを得るも富を増すことは出来ず、唯だ其の減少を防ぐに過ぎぬのである。處で日本の今日にては大に利益せねば國債を返すことが出来ぬ、されば農業者は必要であるも、利益を云ふ方にはならぬのであるから、工業は國民經濟として利益を得ることが出来る故に、大に是れ

を奨励せねばならぬのである、自分は將來に於て工業は大に振はしめ、而して地方に人物勞力を大に收容することを希望するのである。

文化的設備の勵行

斯く地方に人物を集中するには、成るべく便利なる生活法を勵行せねばならぬので、即ち文化的設備と云ふことが必要となるが、即ち無料教育の勵行から職業の簡易教育、圖書館、博物館、公園、社寺の補助等で殊に小學校の無料教育は、速かに勵

行して全國に普及せしめねばならぬのである。

而して小學卒業生に對しては地方産業上、及び技術に關する簡易の要件を無料を以て教育するは、最も必要のことである、これは特に地方少年を地方に引留めて、地方産業を世襲せしむることが大切となるのである。

又救貧社會は設備としては少年感化院、貧民救療所、無料合宿料、實費飲食所、共同浴場、幼兒委託所、共同長屋、公設質屋、職業媒介所を設備して地方の資本勢力を都市に集中するを防ぐのであるが、此等の設備行爲は今日の地方自治体にては難

事であれば、町村を大にして市に發達せしむる事に努め、農村は此の市を中心として發達繁榮させる様にせねばならぬ、斯くするに於ては附近の農村は其の恩澤を受けて發達する事となるのであらう。

斯くの如くに地方を救済するには、地方の改良を急務とするのである、文部省の上原氏も曰ふ、地方改良の必要なることは既に世の定論であつて、今更絮説するの要はないのであるが、要するに國家が健全なる進歩發達を爲すが爲めには一面に於て國民の智識を向上せしむると共に、他面に於ては産業の發達を

企圖せねばならぬ、換言すれば精神上に於ても改良發展の實を擧げねばならぬのである。

然らば如斯き改良發展は、果して何れより始めたならばよいかと云へば、小よりして之を大に及ぼさねばならぬのである、即ち國家全体を發達せしむるには、地方の改良より先づ出發せねばならぬのである、蓋し地方は國家を構成するの主要なる分子であるから、これを分子として向上發展せしめねば、集團たる國家をして進歩發達せしむることは出來ぬのであつて、地方改良の要は畢竟するにこゝにあるものと云はねばならぬのである。

る。

果して如何なる點に改良すべき？

然らば地方に於ける如何なる點に於て改良すべきか、これには固より多種多様のことがあるのである、例へば生産物の改良も忽にすべからざると共に、生産方法の改良も必要である、或は生産組織の改良、或は從來に於ては開墾を試みざりし山林原野を開墾して、所謂土地的遺利を收捨することや、或は又勞力の方面より見るも、由來農家は或る時期は非常に多忙にて、而

も或る時期は比較的に閑散で勞力の節制で、兎角く均衡を失するの嫌ひがあるのである。

夫れで之れを副業なご、提携せしめ、能く勞力をして年中平均に用ゐしめると云ふことも、亦勞力上の遺利を收捨する一方法となるのである。或は又農民は由來其の資本は尠少であるが而も是れを有効に活用して資本上の遺利を開發することや、或は又交通機關の發達連用等、擧げて來つたならば改良すべき方は頗る多いのである。

以上に於ける改良事項は主として是れを、物質上の方面に於

て見たる處であるが、その精神的改良の方法としては、先づ第一に國民の智能を啓發して、日進月歩の世界的文明に後れず、また公共心を涵養し或は民風を改善するなどのことは、その重要な事柄となるのである。然らば之れを遂行するには、果して如何なる方法を取るべきかと云ふにこゝには、現に色々の機關が施設せられて、之が實行に盡して居るのである。例へば農會の如きは調査上の機關となり、或は又實行上の機關となり農事の改良を圖り或は産業組合、貯蓄救済組合等は、資本的遺利の開發に資し、或は農事試験上の如き生産物の改善生産方法

の改良を企て、居る、其他様々なる機關せあるのであるが、此れ等は何れも皆必要であつて、皆それ／＼に動いて居るのであるが、併しそれ等は主として生産的に地方の改良に盡して居るのであつて、その精神的方面の改良に付ては、主として此等以外の特殊の機關に之れを俟たねばならぬのである。

是れ即ち教育上の機關であつて、之れが活動に依つて一面に於ては國民の智能を啓發し、他面に於ては其の徳性を涵養せしめねばならぬのである、然り而してその教育の種類たるや、之れを最も有効適切ならしめんには、農村にありては勿論農業教育

欠

開くと共に、生産地より消費地までの運搬が、極めて僅少の時間に出來て、更らに倉庫と云ふものがあつて金融に便にして居る、科學の進歩と共に通信機關は益々完備し、極めて短期の間に商取引の決済が出来る様になつた、内地は勿論遠く太平洋、印度洋、大西洋までも横斷する處の國際貿易資金の運轉すら、短期日の間に殆んど遺憾なきまでに出来るのである。

然るに一步踏入れて工業資本となると、既に多少の面倒があるのである、工業となればその製造原料を蓄積して置くの必要がある、従つて商業資金に比しては幾分長期に及ばねばならぬ

欠

併し稍や長い幾分固定すると云ふまで、農業資金が全然商業資金と趣きを異にするが如き比ではないのである、農業にも種類によつて自ら差はあるが、何れにしても商工業資本に比しては随分長期でなくてはならぬ。

商業資金を二三ヶ月とするなれば工業資金は半ケ年、農業資金は一ケ年以上に及ばなければ、その効果を見ることが出来ぬと云ふ差異がある、農業資金は一旦放下した以上は、收穫までには回収することは出来ぬ、その間は資金を地中に埋没固定させて置かねばならぬ、耕地改良の如き、灌漑の如き、排水の如

き事業となれば、更らに長期のものでなければならぬのである、斯く農業資金は長期であると共に、又低利でなければならぬ、何處の國にあつても農業の収益といふものは低率のものである、就中我が國の農業の如きは恐らく四朱内外の利廻りにしか當らぬことであらう、それ故これに投すべき資金は餘程低利の資金にあらざれば、その効果を擧げて改良、發達を望むことは不能と云はねばならぬのである。

こゝに於て歐米、殊に歐羅巴では農業資金の供給に就いても種々に研究され種々の設備が出来て居る、我が國に於ても勸業

銀行、府縣立農工銀行と云ふものがあつて、専ら農業資金の供給に盡す譯となつて居るのである、それが爲め農工銀行の如きは、各府縣が大株主となつて數年間は無配當として、由つて以て低利資金の供給を爲すと云ふが如き特權を與へられて居る、又勸業銀行の如きはその資本金に、十倍の所謂割増附債券を發行し得るの特權を與へられて居る。

元來我が國の施政方針から云へば、斯る賭博的性質を含みたる射倖的の遣り方は、甚だ忌むべき處なるにも拘はらず、斯の如き特權を勸業銀行に與へて居ると云ふのは、實に農業に對し

て長期の貸付を爲さしめんが爲めに外ならぬのである、農工銀行の如きは更らに條例を改めて、不動産一般に貸付を爲し得ると云ふこととなしたるのであるが、この改正の精神は言ふまでもなく長期貸付の上に、一層の便を與へんが爲めであらうか、實質は市街地貸付などが次第々に多くなり、農地貸付が少くなつて來たことは遺憾千萬のことである。

右の如き次第であるから勸業銀行、農工銀行が充分なる活動さへすれば、我が國の農業はどしどし發達して行くべき筈である、然るに實際の事實に見るに更に其の反應が、現はれて居ら

んど云つて差支ない位のものであつて、第一に我が國人の人口は年々増加し、又商品の如きもどしどし増加しつゝ、あるにも拘はらず、農業に於ける收穫増加は極めて微々たるものである。麥其の他雜穀とても勸業銀行、農工銀行設立以來二十餘年、既に一般の發達を見るべき筈であるに、而も其の實際は特殊の地方を除きては、更らに効果が見えて居らぬのではないか、年々外國に仰ぐ農産物の増加しつゝ、あるが、如きは、最も明瞭で農業不振を證據立つるものではないか、尤も此等の不振の原因が、盡く勸業銀行、農工銀行にあるとは云ひ得ないのであるが

多少の責任あることは、國家が此等の銀行に與ふる處の上述の特權から考へて見ても、了解さるゝことであらうと思はれるのである。

◆ 斯くして勤勉正直なる民たらしむ

處で爰に農業不振に對して金融上から今一つの原因があるのであつて、それは果して何であるかと云ふに、不動産抵當貸附と云ふ原則があつても、折角借りたいと思ふものには不動産を持つて居らぬものが多い、或は持つて居ても極めて僅少しか持

つて居らぬと云ふ場合がある。而して此の不動産を多く所有せざる所の小農民こそ、實に我が國の農民中の過半を占めて居るのであつて、而も最も痛切に低利資金の供給を要するものは、亦實にこの小農民であることも議論の餘地がないのである。

勸業銀行設立の當初、擔保品を所有せざる農民であつても、勤勉と正直とを資本として、二十人以上の連帶責任を以て申込んで來たなれば、それに對して貸出してもよいと云ふ條項があつた筈である、この條項は文字は或は違つて居るかも知れないが、正に勸業銀行、農工銀行の條例中に存在して居ることは確

かである、而してこの條項は果して實行されて居るかと云ふにその條項の存在すら世間に忘れられて居る程であるから、實行の如何は押して知ることが出来るのである。

當事者は或は農民がこの條項に應じ得べき、組織をして來ないからと云ふかも知れないが、若し組織して來なかつたならば何故に斯くくの條項があるから、これに應ずべき組織をして御出なさいと、云つて知らせてやらぬのであらうか、勿論此等條項に應ずる組織を作る責任までも、銀行に強いんとするのではないのであるが、斯くの條項が存在して居ることを知らせ、

彼等の自營心を喚起することをも爲さぬと云ふことは、直接には農工銀行、間接には勸業銀行の責任と云はねばならぬと思ふのである。

斯くの如くにして勸業銀行、農工銀行が當初設立の目的に立ち返つて、農民の自營心を喚起し農民又大に奮勵して、信用組合の如きものを組織するに至り、更らに勤勉正直ならぬものは其の組合に、入ることを許さぬと云ふやうのことにしたならば間接には彼等をして勤勉にして正直なる民たらしむる、農民教育の一端ともなるのである。

而して金融の途を開いて或は肥料の改良に、或は農具の改良に、或は耕地の整理に、或は副業の創始に、或はこれに伴ふ住宅の改良に、或は貯蓄心の奨勵に勤めたならば、爰に始めて我が國農業の骨子たる、小農の活動が始まることとなるのである。斯くして始めて我が國の農業も、最近科學の進歩の恩澤にも浴し得るに至るのである。

今日の状態を以て推移する間に於ては、我が國の農業と云ふものは、永久に文明の餘光と隔絶して行かねばならぬこととなるのである、この點に關しては農民自身も亦、大に自營せねば

ならぬことではあるが、勸業銀行、農工銀行の當事者が正に大に猛省せねばならぬのである、それは寧ろ彼等の責任なりと云つてもよいのである。

◆ 生産物需給の現状如何

農業より得る生産物を金額を以て正確に積算すると云ふことは甚だ困難であるが、従来農商務省に於て調査したる生産數量を基礎として、概抗的推算を試みるときは、少くとも十八億圓を下ることはない様である、試みに其の主なるものに付て見る

に、筆頭第一は穀類の十二億五千萬圓、次に繭及び蠶種の一億六千四百萬圓、次は園藝農産物中の蔬菜の一億五千萬圓、次は特用農産物の六千五百萬圓、次は園藝農産物中の果實四千五百萬圓、次は畜産物の四千二百萬圓其他と云ふ數高が現はる、のである。

然らば農産物の海外貿易の近況は如何であるかと云ふに、輸出の筆頭は蠶糸類で一億六千七百萬圓あり、遙かに下つて製茶砂糖、果實、蔬菜、麥稈及び蘭製品で合計二億三千四百餘萬圓であつて、總輸出額の四割四分餘に當つて居るのである、これ

に對して輸入は棉花の一億九千三百餘萬圓を筆頭に、穀類、肥料類、粕糟、畜産物等で合計三億四千三百餘萬圓であつて、輸入總額の五割五分餘に上つて居る、即ち農業國を以て認められ自らも亦任じて居る我が國の農産物の海外貿易に於ける差引計算は、遺憾ながら一億圓の入超に甘んじて居る次第である。

今や貿易の逆勢を挽回するの最も切要あるときであるから、農業界に於ても亦大に内國生産を奨勵し、輸入を防遏し、輸出を増加するを期するは云ふまでもない事で、各縣農産物の全体に亘つて、銳意生産の改良増加を圖らねばならぬのは勿論のこと

とであるが、就中將來商工の發達と共に益々喫緊の問題であるべきは、主要食物供給の問題である。

最近三ヶ年間を平均したる我が國內地に於ける主要食糧品の生産高を見るに、米の五千七十二萬五千二百二十六石を筆頭に、小麥五百十三萬八千八百八十五石、大麥九百九十四萬六千九百六石、裸麥八百十九萬五千四百四十六石、大豆三百五十三萬三千七百九十一石、粟百九十七萬九千九百六十一石、蕎麥百七十七萬四千九百二十六石、甘藷九億三千九百七十六萬千七百七十六貫馬鈴薯一億八千二百七十八萬三千二百八十貫と云ふ數字を示し

て居るのである。

この外果實、蔬菜、肉類、砂糖、製茶等もあるのであるが暫く之れを省き又大麥、裸麥、粟、蕎麥、馬鈴薯、甘藷等は自給自足の實況とあるから、これを除いて結果米、小麥、大豆のみにて需要供給の大勢を考へて見たいと思ふのである。

米穀需給の狀況、内地生産高は四千九百五十二萬四千三百十三石にして、輸入高は二百五十三萬四千二百四十四石として移入高は百二十萬五千四百四十四石、輸出高は二十萬九千五百四十一石で移出高は五萬三千三百一十一石差引消費高は五千二百九

十七萬二千九百十六石である、この數字は最近三ヶ年間の平均に據つたものであるから、統計表に表はれて居る各年の數字とは符合せぬのであるが、大体として寧ろ事實に適合して居るのである。

即ちこれに依つてこれを見れば、我が國內地に於ける米の消費額は約五千三百萬石であつて、内地の生産高約五千萬石、殖民地よりの供給百餘萬石を加へて、尙ほ約二百萬石を海外よりの輸入に仰がねばならぬと云ふ實狀にあるのである。

小麥需給の狀況は、内地生産高は五百十三萬八百八十五石、

輸入高は六十九万六千三百三十二石、差引消費高五百八十三万五千二百七石となる、右の外に小麥粉の輸入約二十八万擔であるから、これを小麥粉に換算すれば十八万石となる、即ち之を加算すると、輸入約九十万石、總消費高約六百万石となるのである。

大豆需給の状況は、内地生産高は三百五十三万三千七百九十一石、輸入高は百六万六千百石、移入高は七十二万五千二百九十六石、差引消費高は五百三十二万五千八百七十七石となるのである、尤も其輸入大豆の内四五万石は油糟製造に使用されて

肥料となるのであるが、而も尙百万石内外は食料に供せられ、結局内地に於て食料として消費せらる、大豆は、約四百七十八万石である、而してその中約百二十万石は關東州及び朝鮮より輸入される、ものである、次に参考の爲めに獨英佛に於ける主要食糧たる、小麥の需供給の狀態を掲げて見やう。

獨逸に於ける小麥の生産及び消費は、國內生産高は三千四百四十七万二千二百十八石、輸入高は千九百三十五万二千四百四十九石、輸出高は五百八十四万五千五百六十一石、差引消費高は四千七百九十七万九千六百六石で、即ち消費に對する國內生産

の割合は七割二分である。

佛國に於ける小麥の生産及び消費は、國內生産高六千百十七万五千五百石、輸入高七百一十一万五千九百石、輸出高は四十六万四千四百石、差引消費高は六千七百八十三万三百石にして、消費に對する國內生産の割合は九割となるのである。

英國に於ける小麥の生産及び消費高は、國內生産百十五万五千九百九十九石、輸入高四千三百四十八万四石、差引總額四千四百六十三万六千百十四石であつて、消費に對する國內生産の割合は二分六厘となる。

以上は何れも最近二年間の平均數字であるが、これによつて見ると獨逸の全消費の二割八分、即ち日數に換算して一ケ年間に約百二日分の小麥を外國の供給に仰ぎ、佛國は一割即ち約三千五百石の小麥を外國の供給に仰ぎ、英國は實に九割七分七厘を輸入に仰ぎ、一ケ年間に於て本國內に生産する小麥によつて支へらるゝ日數は、僅々十日間に過ぎないのである。

産業振興に努力せよ

此等佛獨英の狀態を比較せば、我が國の米の不足額は必ずし

も其の數字の驚くの要なきが如きも、今後人口は年一年増加するものと見なくてはならぬ、又人口が増加せぬ様であつたならば、それこそ國家の一大事となるのである、而して人口増加と共に米の消費は益々増加するのであるから、將來に向いて米穀自給の策を建つるは特に緊要の事柄と信せざるを得ないのである。

されば米麥の改良増加を圖ることは、本邦農業の大綱である、而してその方法として従來耕地の擴張、作物品種の改良、肥料の改良、施肥法の指導、病虫害の防除、農具の改良、牛馬耕及

び二毛作の普及等、これが獎勵に努めつゝ、あつた次第である、處が一方に於ては米價が昂騰すれば、米の生産高は自ら増加するか、低落すると亦自ら生産高が減少すると云ふが如し、穀物生産の増減は、穀價の騰落と密接なる關係を生ずると云ふ事實がある。

故に米價高低の激烈ある時は、常に米作の根底を動搖せしめ健實なる米作の發達を阻害すること深甚なるものがある、であるから米作の根底を固からしめ、米穀增收を圖るの捷徑は、米價の激甚を少なからしめ、常に米價をして適當の位置を保たし

むるの必要があるのみならず、更らに一歩を踏み込んで、商工業をして健實なる發達を遂げしむるにも、亦食糧品の價値を適度に保たしむるの必要がある。

然るに困つたことは我が國內地の産米は、外國米と全然其の品質を異にし、(幸に朝鮮米は内地米と極めて近き品質を有して居る)世界の米市場との共通點をもつて居らぬ爲めに、時々米價の變動をして一層激甚ならしむることがある、故に生産方法の改良を加ふるに更らに販賣組織の改善、代用食糧品の使用獎勵等、其他米價調節と云ふことは、今後に於て益々切要の

ことと信ずるのである。

當局が此の點に對し万難を排し、極力努むることは勿論であるが、凡そ國家的の事柄就中産業の盛衰は、主として營業者の奮勵と否とに有すること多く、政府は單に之れが補導の任に過ぎぬのであるから、産業振興に當つては官と民との區別、黨派等の區別は勿論あるべき筈なく、舉國一致各人共に國家の隆興は一に各自の双肩にあるものと覺悟して、奮勵努力すること、を肝要とせねばならぬのである。

◆ 青年の覺醒爰にあり

食料問題に就て以上先輩者の意見を掲げたる處であるが、尙爰に特に之れに關して、一貴族院議員の説を掲げて研究せんに曰く吾人は強いて農、工商業者と云ふものに區別を立てるとすれば、我々は何れかと云へば商工黨の一人である、故に食料品就中米價の低廉はある程度まで歡迎して止まぬ處である、それは何故かと云へば米價の低廉は、やがて賃金其の他の低廉となつて、それだけ廉價なる商品に社會に提供し得る譯となるから

である。

併しこれは單に商工業者の側に立つてのみの觀察であつて、公平に我が日本帝國の現在及び將來より打算して考へて見るならば、斯の如きは單に一片の空想的希望に止むべきであることは、これを承認するに吝かならん考へである、さりながらそれと同時に米價は如何程高くとも結構である、と云ふやうな農業保護論の裏にも亦國家を誤り、農家を過るべき理由を含蓄して居ると信するのであるから、此點に就いて少しく苦言を呈して見たいと思ふ。

言ふ迄もなく日本の立國の基礎は、將來も亦過去と同様に農業の上に置かなくてはなるまいと信ずる、と云ふのは日本人は米食國民である。日本人が米食國民であると云ふことは、歐米人が肉食人種であると云ふこと、餘程異つたる意味を以つて居る、日本人の米食に對する嗜好は、豫想外の犠牲を嘗んしても容易に捨て得ないほどに根底の深いのである。

第二に日本の人口は年々六七十万を増加しつゝ、あるので、今日の如くにして進むならば、大正五十年にして實に一億三四百万にも上るのである、而して他方に於て一人宛て一ケ年の米消

費の高は、米價高と正比例に年々昂進し來つて居る、日清戦役前の一ケ年一人宛消費高は、七八斗より多くて九斗に及ばなかつたのであるが、今日に於ては平均率實に一石零三升三合まで上つて居ると云ふことである。

即ち我が國の米の需要は人口増加による一面と、生活程度の向上に依る一面と、二重の増加を以て進みつゝ、ある次第である而して之れが供給は實に我が農家諸氏の双肩に繋つて有する次第であるから、この意味に於て或る程度まで農業を保護すると云ふことは、やがて國民保護であつて寧ろ當然の處置である。

云へるのである。

而してこの保護と云ふ内にも、外的と内的の二方面があるの
であつて、低利供給の如き産業組合助長の如き、耕作法の改良
の如き農業教育普及の如きは、内部より自然と農業の發達を助
長するものである。之れに對して輸入米粗税の如きは外的であ
る、而して如何なる事業たるを論せず、苟しくも保護と云ふも
のは出來得べくんば内的でありたいものである、宋人の苗の長
ずるを助けんとして、これを抜いたと云ふが如き保護は、百害
を一つて一利がないのである。

況んや我が國の米の需給は、現に年々必ず巨額の不足を訴へ
て居るのである、最近我が國の米作が異常の進歩を爲したりと
云はるゝに拘らず、尙ほ五千万石の收穫は平作以上の豊作とさ
れて居るのである、而して需要の側にあつては、年々五千五六
百万石は是非とも消費するのである、されば賣米力ある大中の
農家としては米價は高いほど喜ぶかも知れぬのであるが、我が
國の實情から打算するならば、一石代價金二十二圓以上の米價
の高いものを食はせては、實際に國際的存立の危殆ならしむる
恐れさへあるのである。

◆ 此責任果して何人にありや

若しも日本帝國が世界に於ける先進國で、日本の資本が世界に散分されて居つて、年々その利潤が内地に向つて流れ込むと云ふ如き國柄であつたならば、問題は自ら別となるのであるが今日に於ては實に巨額の國際的債務國である、加ふるに貿易は年々逆調である、この上更に貿易の如何に關係なしに年々必ず支拂はねばならぬ、巨額に對するの支拂利子がある。果して然らば何を以て果して之れを償却し行くべきか、自國

の食糧品すら十分に供給し得ざるの狀態にあつて見れば、如何にして農産物の輸出を以て、これが決濟を畫し得べしとは考へられぬのである。近來低利資金の輸入に依つて、大に農業を開發し米作を盛んにし、よつて以つて農産物の輸出を企てやうと云ふ議論もある様に聞くのであるが、果してさう云ふことが實際に行ふて、豫想の結果を收め得べきであらうかどうか。

理窟は兎も角農業と云ふものは、その本來の性質として土地の廣狹と云ふことによつて、大体の範圍を制限されて居るのであるから、自然的にその開發と云ふことは、耕作法、開墾法の

改善と云ふことに止まらざるを得ないと信ずる、然らば結局農産物の輸出に依つて對外貿易及び外債利子の決済を企つると云ふが如きは、寧ろ一種の誇大的豫想に歸するものではあるまいか。

期く考察して來ると將來これが決済の任務を負ふべきものは先づ以つて商工業の發達に待たなくてはならない、幸にも日本の對岸には四億の人口を包含せる支那がある、この支那の將來は果して如何に變化して行くべきかは、豫言者なくする限りは今日より容易に推斷することは出來ぬのであるが、併し世界に

於て一二を争ふほどに旺盛なる繁殖力を有して居る四億の民は、政体如何に變化するとしても、その將來は大に矚目すべきものがあると信せざるを得ないのである。

然らば今日までの睡眠状態より醒むると共に、彼等の生活は駁々として大に向上し來るものと見なくてはならぬ、今後の數十年世界の中心となるものは、實に支那であることは最早何人も之れを承認して居る處であつて、今や歐米諸國は悉く眼を支那に注いで居るのである、幸ひに我が國は支那に對しては先進國である、直接歐米諸國に對しての貿易に於ては、生糸の如

き原料品か美術品の如き以外には、彼等のと對抗し得ざる處であるが、支那貿易に於てならば優に歐米人と對抗し得るの形勢の地位にあるのである。

◆ 農村の責實に此にあり

天の時地の利も人の利に如くと云ふ通り、如何に野戦軍たる商工業者が形勝の地位を利用して、彼等碧眼者流と對抗しやとしても、輻重隊とも云ふべき農業者が只管に農作物、殊に米價の昂騰なことのみに眼目に置いて、日本と云ふ國情を考へて呉れ

なくては、商工業者も實際思ふ存分に働きをなすことが出来ぬのである。

内地のみは需要者の目標とする商工業ならば、生産費が高めば物價も引上がると云ふことで済むかも知れぬが、國際貿易となつては世界の諸國が相手であるから、生産費の多くか、つて居る商品は、戦争場裡に於て必然失敗者となるのである。

勿論商工業者自身にも大に自ら内部に反省して、出来得る限りの努力を以て改善と發展とを計ることは、寸刻も忘却せんやうにしなくてはならぬのであるが、同時に農業者に於ても商工

業者の苦衷を得して、輸入米初税の如き天下の愚案は、綺麗薩張りと放棄して貰ひたいと思ふのである。

成程議論しては、保護貿易にも色々の特色も妙所もあらう、重税を負担して居る内地米に對して、輸入米を無税とするといふことも、一應は不條理に聞ゆるかも知れぬが、同時に外米の需要者は何人となるかを考へて見たならば、特に細民の食糧品のみに限つて課税するが如き、斯の如き税種は一日も早く撤廢すべきものと思はるゝのである。

これもこれも國家と云ふ大なる屋台骨を張る上のことである

戻税など、いふ小刀細工や租税負擔の義務がどうか、關稅賦課の權利がどうか云ふが如きは所謂議論の爲めの議論であつて、結局は議論倒れの議論である。

要するに自らの肉を割いて自己の口腹を充すが如き關稅などは、一日も早く撤廢すべきであらう、政府をしても大に農業を保護する必要を認めたとするならば、斯かる消極的の方策を捨て、この外に尙ほ何程も積極的の保護策があるかと思はれるのである。

回 自覺したる青年奮闘の地

◆ 是即ち所謂冒險的の職業か

世間の人は云ふ農は國本なりと、建國の基礎は農業にありと
 か、農民は實に立國の最重要分子なりとかと、そして無暗と農
 及び農民を擔と上げて居るのであるが、その實際に於て政府が
 農民に對するの仕打と云ふものは、全く之れを顧みざるの傾向
 があるのである 故に第二次の農村を建設すべき地方青年たる
 もの、決してこのお褒の言葉を頂戴して満足して居る場合では

ないのである、大に覺醒して而して自ら發奮努力せねばならぬ
 のである、之れに關して或る學者は曰く、元來農業ほど冒險的
 のものはないのである、第一播種の時と收穫の時、即ち資本を
 卸すときと利益を回収する時とは、その間年年以上の間隔があ
 る、従つて播種の際に豫め收穫時の相場を確めて置くことは出
 來ぬ、言葉を換へて云つたならば、如何ほどの資本に對して如
 何ほどの利益を得べきか、と云ふことを豫定することが出來ぬ
 のである。

而もその作柄に至つては多くは自然力に支配され、良くも悪

くも人力にては如何とも爲すことが出来ぬ事情もある、然らば世に斯く危険にして冒險的の事業は多くあるまい、彼の紡績事業や其他百般の商工業は、景氣の善悪振否に従つてその規模を伸縮することが出来ぬのであるが、農業に至つてはそうは行かぬのである、故に農産物は普通の商品とその性質を異にして居るものと云はねばならぬ。

然るに商工業者の目からは同一種の如く見て居る爲めに、農民は大なる苦痛を感じるものが多いのであつて、他の事業に比して大なる相違があるのである。

農は以上の如く詰らぬものであるならば、何故に農を去らぬか、目に見えて割の合はぬことがそれほど明かにある以上は、自分に農を去るがよい、農業に生れたからと云つて、必らずしも一生を百性を以て終らねばならぬと云ふ束縛は毫もない、何處へでも自由に勝手に行くがよい、その議論を立つるものもあるのであるが、斯く斯る主張は個人々々の主張ならば兎も角も苟しくも爲政者の立場からは斯かる主張は決して通らぬのであつて、政府者又は政治家たるものは、かゝる事實を見たならば之れを救済せねばならぬのである、國家の公益から云ふも大經

濟の見地から見ても、之が救済の方法を講ずるにあらざれば、國家はそれだけ立國の基礎を危くする所以である、然るに農業と云ふことに對して、未だ實際的に之れが救済の途を講ずる者のないのは、甚だ憂ふべきところではあるまいか。

而して中には田舎は暮しよく都會は暮らし悪い、従つて之れに酬ゆる處にも差違あるを免れないなどと云ふものもあるが、之れも亦大なる間違である、一を知つて未だ二を知らざる處の議論である、それは果してどうしてかと云ふに、交通機關の發達せる今日にあつては、都鄙相接近しその生活状態も亦平均し

て居る、更に交通機關の發達は物價の平均を招來すると云ふことは、即ち經濟上の原則であるのである。

然るにどうであるか稍や利益の多い煙草とか、綿花と云ふが如きものは悉く皆その製造權を奪はれて、今や農民は糸も煙草も酒も砂糖も買はねばならぬのである、否味噌も醬油も買はねばならぬ様な境遇に立つて居るのである、此の點に於て何ものが都と變り居るであるか、唯だ家賃のみが明かに都會と相違して居るに過ぎぬのである、故に生活程度は都會に於て高まり行くと同じく、田舎に於ても亦高まり行くのであつて、物價の騰

貴が都會の勞銀の騰貴を促して居るものとすれば、田舎も亦同じく勞銀の高くなるのが當然であらねばならぬ、然るに實際はどうであるか、職工の勞銀は物價の騰貴に比例して、相伴はぬと云ふことはないのであるが、唯だ農民のみは勞銀は依然たるも生活程度は世間並の高めなくばならぬ様に餘義なくされて居るのである。

農民は斯の如き窮狀にあるのである、然るに之れに向つて國家の大本など、云はるゝのは、寧ろ有難迷惑の話であつて斯く口々に褒めて貰ふ代りに、この實際を如何にして救済すべきか

と云ふことを講究して貰い度いのである、既に大責任を負擔される以上に於ては、相當の報酬を増してやるのが社會政策上必要のことであつて、それに伴つて生活問題の解決が出来るのである。

◆ 醒めたる青年活動の天地

世の學者とか政治家とか云ふ人々は、生活問題等を論せんとするに當つて、常に其の材料を都會にとり、都會の勞働者、職工等を標準として論ずるの傾向がある、これは以ての外の不

平である、元來農民は柔順であつて、聲が高くないのである、都會に於ける労働者のやうに動もすれば聲を高くして、騒ぎ立つるが如きことは殆んどないのである、農民は實に爾く柔順であるのであるが、柔順なるが故に之を顧みずして放つて置いて聲を高くして騒ぎ立つる者のためにのみ救済策を講ずるが如きは、偏頗之れより甚しきはないと云つてよいのである、柔順なる低聲の者の爲めには、却つてより大く助けてやらねばならぬと思ふのである、今日に於ける農村は何れも疲弊して居るのである、従つて農村に於ける青年の元氣は、いたく消衰せるの觀

があるのであつて、これ實に彼等が内地にのみ跼蹐たらんと欲するからではあるまいか、内地に於ける農業は割が合はぬと云ふならば、何故に海外に出でぬのであるか、海外は何れも青年を迎へつゝあるのである。

最近に於ける我が産業の勃興は素晴らしいものであつて、従つて農業方面の仕事も益々増加して來てゐる、而も之れ等皆有爲なる青年の力に待つことが多いのである、見よ臺灣に朝鮮に樺太に將た北海道に從來よりも遙かに仕事が多くなつて來た、苟しくもこの大國の青年が、進んで職業を求めんとするには、

があるのであつて、これ實に彼等が内地にのみ跼蹐たらんと欲するからではあるまいか、内地に於ける農業は割が合はぬと云ふならば、何故に海外に出でぬのであるか、海外は何れも青年を迎へつゝあるのである。

最近に於ける我が産業の勃興は素晴らしいものであつて、従つて農業方面の仕事も益々増加して來てゐる、而も之れ等皆有爲なる青年の力に待つことが多いのである、見よ臺灣に朝鮮に樺太に將た北海道に從來よりも遙かに仕事が多くなつて來た、苟しくもこの大國の青年が、進んで職業を求めんとするには、

敢て國內にのみ醒醒すべきではない、遠くは南北亞米利加に、濠洲に南洋諸島に又暹羅、安南地方など我が農村に於ける青年の、發展すべき範圍は極めて多いのである。殊に暹羅安南に於ける米作、南洋諸島に於ける護謨栽培事など、却々に面白いに相違ないのである、然れども先づ手近なる新領土、臺灣、朝鮮、樺太などに就いて言はんか、此等の地方に於ても最も大切とすべきは、大和民族の勢力を扶植することであつて、勢力を扶植するには我が民族中の、優良なる分子を此に移植せしめねばならぬのである。

此等の地方の商工業を盛んにすることは、有益であらうし又望ましきことであり、我が民族の移住は之れによつて勿論得られないでもあるまい、併し之れに依つて多くの穩健着實にして且つ優良なる階級を得ることが六ヶ敷ひ、之を各國に於ける歴史に徴するも、多くの人々を新領土に移住せしめて、これに優良なる階級を造り、本國の眞勢力をこゝに扶植して、自衛の力ある一範圍たらしむるには、多くの農民を爰に定着せしむるの外、途なきことは疑いなきことである。

然らば即ち教育ある處の優良なる青年農業家が卒先して、此

等新領土に移住し模範的にこゝに農業を經營し、以て多くの農民の移住を誘致するやうでなければならぬ、凡そ氣候風土の異なる新領土に移住して、利益ある經營をすることは決して容易なことではないのであるから、卒先して模範を示すものがなくてはならぬのである、此の模範なくして徒らに多くの農民を移住せしむるは、やがて失敗の恐れありと云ふことを知らねばならぬ、されば新領土の經營については、各國政府に於ても皆模範的農業家に補助を與へて、これが移住を獎勵することに務めつゝあるのである。

◆ 須らく新領土の經營を望む

この三新領土は氣候の上から云ふも、農業の經營から云ふも三種の相違を呈して居るのである、臺灣は熱帶地方であつて、米作、甘蔗、茶など種々の作物皆な熱帶的經營を要するのである、樺太は恐らく牧畜を主とすべき、寒地の農業經營を要するであらう、朝鮮は即ちその中間に位して、暖地あり寒地あり南北その事情を異にして居るのだが、而も我が内地と大体に於ては相均しき經營を主としてよいと思ふ。

北海道は此等新領土の經營に蔽はれて、動もせば世人に忘れられんとするの傾があるが、而かもこの經營の大切なることは新領土と同一的であつて新たに三友が出来たからと云つて、故き一友を忘るべきものではないのである、此の地には尙多くの原野が残つて居つて、多くの農業經營者を内地より招き致さねばならぬのである、その人々は未だ甚だ不足して居つて、内地の如く充分なる自衛の力を有して居ないのである、この地に於ける農業經營はその寒地にあるだけに、内地よりも稍や大きく經營せればならぬので、内地にあつて掌大の田畑に踞踏たるよ

りも、又一段の利益を得べきの望みがないでもない資本あり技倆ある農業家ならば、随分牧畜と農業とを兼ねたる所の大經營を計畫することが出来るのである。

内地に於ては南端に東北に随分開墾の餘地がないではない、而も重なる急務は従來の農業を改良することである、農業改良は何の爲め必要であるか、先づ第一は非常な勢ひを以て増加する所の人民は、最も潤澤なる食物を供給するが肝要である、平生に於てさへ尙ほ然り、況んや一朝外國と事を構ふることあるの日に於て、若しも食物が不足して多くの輸入を外國に仰がね

ばならぬことがあつたならば、戦争に於てはよし是れに勝つとして見ても、到底戦勝國たるの権利と利益を收むることは出来ぬ、而も之等の爲めに勝敗地を換へねばならぬ恐れがないとも言はれぬのである。

日露戦争の際に於て若し我々が米穀を、印度洋の方面に仰いで居つたものと假定せばどうであらうか、ロゼストウエンスキ一將軍が、僅かに一二隻の軍艦を以て印度洋に遊戈して、我が運送船を脅かすが如きことがあつたならば、それにて充分彼等は目的を達することが出来るので、東郷大將に於ても亦如何と

もすることが出来ず、極めて残念なる結果に終つたに相違ないのであるで、假りに想像としても尙ほ吾人として、肌粟も生ぜしむるに足るのではないか。

斯くの如くにして食物の増加、即ち米作改良の必要なることは論を待たぬ處である、殊に大切なるは農業者其の人である、日清戦争に勝利を得たるも、日露戦争に勝を占めたるも言ひ換へて云つたならば日本が世界の一等國として、東洋に覇を唱ふるに至つたのは、穀物を多く生産して外國より之れを輸入すること、必要少なからしめたと又遼東半島に、滿洲の野に多

くの忠良にして、且つ勇敢なる兵士を出したる農業者の力が、その主たるものであつたことを疑ふことは出来ぬのである、然るに一旦農業者の減少するときは、強兵の士が従つて漸く減少するの恐れあることを、各國の歴史に於て之れを徴することが出来るのである、然らば農業者としてその暗に安んじて、その業に力めしむるやうにしなければならぬことはいふ迄もないことであるまいか。

❖ 西歐に於ける殖民熱の勃興に鑑みよ

松岡博士曰く近世化學の發達、機械の發明等と共に社會的關係に一大變動を來し、經濟組織も亦一大革進をなしたが、就中著しき影響を受けたるものは即ち農業である、農業は其の特性として保守的で、自然力に依頼することが多き爲め、その進歩も工業等に比して極めて遅緩である。

歐洲諸國の舊農業國が近世交通機關の進歩によつて、米合衆國、亞爾然丁等の新農業國から、どしどし農産物を輸入することとなつたので、穀價は非常に下落して獨、佛の如きは、關稅によつて之れを防がんとしたのであるが、滔々たる大勢には到

底抗することが出来ぬのであつて、之れが爲め歐洲諸州の農業家は、大に經營難を感じ、更らに他方に於て工業が急速に進歩し、農業よりも多額の賃銀を支拂ふが爲めに、所謂都會に集中の傾向を生じて、農業労働者の缺乏、従つて賃銀の昂騰を來たしたものである。

この傾向は近來殖民熱の勃興に依て、多數青年の海外移植によつて一層強められた、斯様な譯であつて、農業の經營は困難の爲めに、中流以下の農民は追々負債を生ずるに至り、自作農はその土地を賣却して小作人又は労働者に化することとなり、こ

れが爲めに土地兼併の風を生じ、大地主は益々大となり、國家の中堅となるべき中等階級民が、漸次に減少する様になつたのである。この事は國家の將來にとり最も忌むべきの現象である。故に歐洲に於ける舊農國の政治家は、この點に留意して或は關稅政策、或は農業金融機關の設置、或は産業組合の獎勵等種々なる手段を講じて居るが、こゝに説く内地殖民も亦その方法の一なのである、殖民とはその觀念上本國から出る、即ち内地から出づると云ふことが必要なので、即ち本國以外に移住し母國に對し政治上法制上、從屬を得にあるものを云ふのである。

従つて内地殖民即ち内地の一部から、他の一部に移住するものはもとより純粹の殖民ではないか、その性質上の類似から、これを内地殖民と名づけて居るのである、この内地殖民は前述の如く、農業救済策として行はれて居るのであるが、又普魯西ポーゼン州の如くに、政治上、人種上の關係から起つたものもある、そこで内地の殖民の最も盛んなりとせらるゝ、普魯西に就いて少しく其の現状を語つて見たいと思ふのである。

◆ 彼の所謂内地殖民政策

普魯西の内地殖民には二つの種類がある、一は即ち官營にして一は私營である、その官營に於けるものは千八百八十六年發布の移住土着地法に基いて、國民が自ら之れを行ふのである、而して其の目的は西普魯西及びポーゼン州が、ホートラント化せんとする運動に對して、獨乙農民及び労働者を移植して、同地方を獨乙化せんとするビスマークの政策に出でたるものである。

この以前はホートラントに對しては、獨乙は懷柔政策を施したのであるが、その効果なきを見て斷然其の政策を變更し、同

化政策に移り、移住土着委員會を設けて、本部をポーセン市に置き、ポーセン及び西普魯西兩州の土地を買収し、獨乙本國よりは移住民を募集し、根本的にポーランド人を同化せんと企てたのである、その買収すべき土地は農業上有利なる大地主の農業地か、若しくは小地積でもその合併の容易なる土地を主として選ぶこととし、その移住民の種類にも注意して、獨乙民族として移住土着の決心固く、相當なる資本を有し、將來發展すべき希望あるものを選んだのである。

而して其の移住民の申込みに依つて、土地を譲渡し一定の地

代を納付せしめ、その希望によつて土地價格を償却して、その所有者たらしむるの方法を設け、又永小作の如き年限を定め、一定の小作料を納むるの方法をもどり、又普通の農業労働者に對する普通貸借法にて處分する場合もある。

而も此等移住民に對し旅費及び家屋新築其他種々の補助を與へ、その國勞を費すこと既に二億圓以上に及んで居るのであるが、その結果は獨乙人の移植、土地の買収よりも却つてポーランド人の繁殖、土地の買収の方が大であると云ふ現象を來して、失敗と云ふことになつて居る。

その理由は斯る民族同化政策は、却つてホーラント人の敵愾心を喚起し、ホーランド人は上下一致その事に當り、多數の協會組合を作り資金を積み立て、既に二億マーク以上に達し、移住土地委員會に土地を賣るものは除名することとなし、その土地の保全に盡したことで、一方普魯西に於てはその規模小に過ぎて、土地の價格騰貴の爲めに資金の缺乏を來したのみならず獨乙民族に於ては一致協力を缺いである者はその土地價格大なるが爲め、ホーラント人に賣却するものがあると云ふ有様で、未だ充分の効果を擧げ得ることが出來ぬのである。

◆ 私營内國殖民の成績

次は普魯西私營の植民であるがこれが官營と異なり、政治的民族的东西でなく、純然たる農業政策より出でたるものであつて、中等農民の維持健全なる農業の發達に資せんとする趣旨から出でたものである、これには國家の補助あるものと補助なきものがあるが、後者殆んど微々たるものであるから、これを略して、前者に就いて多少説明を試みたが。

この私營内國殖民はその機關として土地取扱委員會を設け

以てその獎勵保護に當つて居るが、移住民を移植せしむべき土地は私人の設定する處で、これを地代農地と稱し豫め私人が其の所有地と、地代農地となしたきことを該委員會に申出で、その審査に依つて許否を決せらるゝのである、尙ほ土地銀行なるものがあつて、その金融に對するの補助を爲して居る、

即ち移住民はこの地代農地を譲受け地代を支拂ふものであるが、その土地價格を償却せんとする場合には、先づ通常その價格の四分の一を支拂ひ、その殘額は地代銀行の地代債券を以て之れを支拂ひ、構買者は地代銀行に對して其の債務を年賦償却

するのが通例である、その殖民の區域は普魯西全國に亘つて居る、その成績は今詳細なる統計がないが、可成の成績を擧げて居ると云ふことである。

内國殖民は獨乙のみならず、英、伊、西、諾威その他の諸國に行はれて居る、英國も近來土地問題矢筈敷く、ロードヂョクヂ氏が社會政策の見地から、その根底的改革に盡力せんとして居る、蓋し同國は十九世紀以來の産業革命、穀物關稅廢止、交通機關の發達の影響を受け、商工業の勃興と共に廉價なる穀物輸入の爲め、農業に著しき影響を受け、耕作地の變じて放

牧地となるもの多く、農地は殆んど貴族畜禽の兼併する處となり、作農地は僅かに一割余を余すに過ぎぬ状況となつて、國內食料の四分の二は外國に仰がざるべからざるに當り、一國の獨立の上より見ても好ましからぬ哀境に陥つて居るからである。

◆ 須らく此の意義ある生活を撰べ

我が農業を見るに矢張り世界の大勢に洩れず、頗る困難を來しつゝ、あるのである、固より我國の農業主産物は米であつて、外國産のものとは品質を異にして居るが爲め、歐洲の舊農國と

は余程趣きを異にして居るけれども、工業の發達、都會人口の集中、物貨の騰貴、賃銀の昇騰等のためにその影響を受け、且つその農地が非常に細分せられ一戸の所有する面積が少い爲めその難澁の度を強めて居るのである、その救済策として當局者も種々と苦心して居る様であるが、内地殖民も亦その方法の一として注意すべきことであると思ふ。

我が内地殖民地として唯北海道あるのみである、この地は既に開拓以來四十余年の星霜を閲して、既に五十万町歩の既墾地と百五十万の人口を有し、尙ほ盛んに移住民を招いて居る、そ

の始めは大農制を採用して広い面積を一纏めとして拂下げて居たが、これでは或は土地が投機の目的となり、或は土地兼併となるの弊害が少くなかつたので、中途に於てその政策を變じて土地の拂下げと共に、健全なる中等農民をつくる目的で、特定地なるものを設けて、一戸に就き五町歩の土地を無償に貸附し事業の成功したる曉には之れを附與すると云ふ政策を採つて居る。

故に今日北海道には自作及び小作が双方兼ねて行はれて居るが、その米具農耕適地は尙ほ八十万町からある、従つて人口も

尙ほ百五十万の包容余力を有して居ると云はれてゐる、それであるから移住に志あるものにとりては、有資の地と云はねばならぬのである、猶北海道の外に純粹なる内地殖民と云ふことは出来ないが、臺灣、朝鮮、樺太の殖民地がある、之等殖民地の政策殊に土地政策、土民政策等と云ふべきことが少くないが兎も角も殖民地として大に注目すべきものがある。

元來農業と殖民とはその間に於て重大なる關係があるのであつて、農業を基礎とする農業殖民は、その根柢が強固と永遠的で、資本よりも寧ろ労働を主として、且つ人口の増加も速く國

家の發展、民族の膨脹と云ふ點に於ても、最も殖民の目的に適合したものであるが、内地殖民に於ても亦この關係は同様である。

近來我が農業の子弟の間には、動もせば虚榮に馳せ前後の思慮もなく、無暗に都會に出でその結果生存競争の激烈な社會の苦難と闘ひ、些細な給料を得て悲惨なる境遇に甘んせんとするもの多く、その極中には不健全なる思想にかぶれるものさへ生じ、然らざるものは徒らに小天地に戀々として、小成に安んせんとするものが多いのは、一國農業の爲め殊に慨嘆に堪へざる

次第である、寧ろ有爲なる農家の青年は進んで南に北に、その發展地を求めて沃野の間に奮闘し、努力して最も樂しき成功を遂げると云ふ、如何にも高尚なる而も意味ある生活を撰ばねばならぬのである。

◆ 都會と田舎との關係

都會の人々は農業は自分等の關知するところではないと云ふ風があると共に、農村の人々も亦農業は都會とは、關係のない様に思つて居るのであるがこれは大なる謬見と云はねばならぬ

のであつて、農業は由來田舎の仕事である、都會とは没交渉である筈である、併しこれは決してそうではないのである、それは都會に於ても亦農業をせよと云ふのではない、農業は田舎に深い關係がある如く、都會にも亦關係があるのであつて、二者決して没交渉でないと言ふのである。

農業と都會との關係はその主觀するものによつて多少異なる先づ農業を主として都會の關係を調べて見やう。

農業が都會より受くる利益の點は、都會が農産物の需用者であることである、都會に近い處に於ては草花なり、野菜なりが

よく賣れるので、農業の利益は之れが爲め多いのである、兎に角都會は農産物の需用者である爲めに、農業が都會より利益は少くない、都會と農村との第二の關係は、都會が肥料を供給することである、下肥は肥料中最も廉價のものであつて、都會附近の農業の利益は、都會からこの廉價なる肥料を得らるゝことが、その原因の一となつて居る、以上は農業家が都會から受くる利益なのである。

次には農業が都會から受くる不利益を調べて見やう、農業が都會から受くる不利益の第一は都會の贅澤な風俗が漸次田舎に

傳はることである、それから田舎の人が都會の表面豊からしい生活状態を見て、農業を捨て、都會に移住することである、この傾向は文明國ほど甚しい、歐米の都會に人々の集中することは激甚である。

英國はこの傾向が最も烈しかったので、現在は全國民の七割は都會に居住し、田舎には三割だけ居る、従つて勞力が不足して農業が適當にやれぬ、それで今日は國民の食物の四分の三乃至五分の四は外國から輸入して居る、都會移住が盛んになれば農業は衰頽する、これが農業が都會から被る不利益の主なるものである。

のである。

然しながら多少の不利益がありても、都會と田舎とは手を携へて行かねばならぬ、されど假りに都會と田舎と仲違ひをしたとする、その時に田舎は都會と分離して、農業がやつて行けるかと云ふ問題を考へて見やう、都會と農村との關係は前述の如く頗る深いものがあるが、今日は段々とこれが淺くなつてくる、即ち田舎は都會から助を借らずに農業を能くやれるやうになつて来る、それは何の爲めとあるかと言へば、人造肥料の生産の盛んになつた爲めである。

昔は肥料と云へば殆んど全部人糞を用いたもので、人糞尿と肥とは同意義に用ゐられた位である、併し近年は燐礦から過燐酸石灰を製造する、瓦斯の洗ひ水から硫酸アンモニアが取れる又土中から掘出した加里塩が獨乙から廉價に輸入される、夫れから石灰窒素と云つて、空氣の窒素から造る肥料が態本などで製造されて居る、斯く人造肥料の製造が盛んになつた爲め、都會から肥料の供給を仰がんでも農業は困らなくなつた、それから農業は都會から餘りある勞力を假るによつて、都會附近の農業は利益が多いと、獨乙の農業經濟學者などに唱へて

居た、併し之れは少くとも東京の如くに、益々發展する都會とは事實でない、都會附近の農業は却つて都會に勞力を吸取されて困るのである、假りに農業は都會より勞力の供給を受けんとせば、この恩恵は今日殆んど有りがたくなつた、何となれば農業に於ても器械を用ゐて、勞力を節する方法が盛んに行はれるやふになつたからである、

例へば犁を使用するにも發動器を用ゐて人の力を省き、又更に新らしくは犁鋤を用ゐずダイナマイトを地中に埋めてこれを爆發させて土地を耕すことをも行はる、様になつた、それで勞

力の供給は恩恵でもなくなつたのである、然し乍ら需要と供給の關係は依然として、都會と田舎との間に成立して居るのであるから、仲達するのはお互に不利益である、矢張り相提携して進まねばならぬのである。

都會は地方に養はる

次に都會を主として農村との關係を觀察して見やう、農業が如何なる利益を都會に興へて居るかと云ふに、第一は農業は都會の人士を絶やさぬことである、都會は空氣が悪いし、小兒の

遊ぶ場所がない爲めに体の發育が悪ひ、この虚弱なる人が商店や工場の不健康なる所で働くが爲めに益々体が悪くなる。

且つ都會は人口が稠密であるが爲めに傳染病の播傳も烈しいそして都會とは田舎の二倍以上も結核病で死ぬるものが多いのである、これは獨り結核病のみでなく、虎列拉でも窒扶斯でも亦同様である、従つて死亡率も都會に多く平均年齢も田舎より低い、倫敦にては都會の人々は三代目には血統が絶えると云つて居る、それで都會の人だけで結婚して行くなれば、繁殖力も弱く子供も虚弱であつて、終には人種が絶えるの慮がある、

然るに此の際田舎から強壯なる血液を移入するので、都會の人種も絶えず却つて都會が膨脹するのである、即ち都會の人種の維持は田舎に於ける農業者が之れを爲すのである。

都會が農業に依つて利益を受くることの、第二は即ちその食物の供給である、人は一日たりとも食物なくしては生きて居られぬ、昔から農は國の本と云ふのは食物を生産するが爲めである、併し今日は外國との交通が開けたので、内地の農業から食物の供給を受けずとも、外國から輸入すれば差支ないと云ふ人もある、尤も米麥の如きものであつたならば、外國から輸入す

ることを出来るであらうが、新鮮なる蔬菜果實などに至つては外國からはるゝ輸入することは出来ぬのである。

第一に我が國は隣國が皆遠いので困難である、殊に戦争にてもあつたならば、米麥にても外國から運送することの困難なるは、英國などに於ても覺悟して居るのであつて、なるべく國民の食物は内地に於て生産せねばならぬのである、併し人口は年々六十万も増加するのであるから、之に伴ふて米麥の生産額を増加し得るや否やは問題である、併し内地に於ても現に田畑に利用して居る面積は、全体に於て十三%に過ぎぬのであつて、

十一%は開墾し得らるゝものであれば、之れを開墾し同時に耕作法を改良して行くには、人口が六十万づゝ増加して行つても百年位の先き迄は困らない、殊にまだ未墾地の多大なる北海道朝鮮、臺灣もあることなれば、決して心配するには及ばぬのである。

都會と田舎と仲違して農業が都會から肥料の供給を仰がずしてやれるやうになつた如く、都會も亦農業から食物の供給を受けずしてやつて行くことも亦絶望でない、食物は何が爲めにどるかと言へば、主として蛋白質、脂肪、炭水化物の三養分をと

る爲めである、蛋白質脂肪炭水化物の三者は、植物の生活力と以て空氣中の炭酸瓦斯や、土中のアンモニアなどから作るものである、それで農業との關係を絶つたならば、勢ひ植物の力を借りて、人工で蛋白質などを作らねばならぬ、これが今日出来るであらうか否や。

蛋白質や炭水化物はこれを有機物と唱へて、昔は生物の力を借らずしては到底作られぬものと思つて居た、然るに數百年前獨乙のウェーラーは尿素なる有機物無機物なる青酸アンモニアから作つた、それで有機物も人工で出来ること云ふ觀念を世人に

與へた、そしてその後實際種々なる有機物が人造された、終には獨乙のフ井ツシャーは炭水化物を人造したが、今一步進めば吾人の養分として缺ぐべからざる蛋白質が出来るであらうと思はれるのである。

斯く化學の進歩に依つて、食物が人造される様になつた、これが成功したならば食物は都會の工場に於て製造される様になり、農業はなくともよい様になるのである、併しこの時代に達するのは何年の後であるか殆んど分らない、假し又食物の人造が出来るとしても、製造費が甚だ大である、米や麥は日光に當

て、肥料さへ興へて置いたならば、自ら澱粉でも脂肪でも蛋白質でも生産する、實に廉價に之れを生産するのである、それで理論上は食物の人造が出来ると云つても、經濟上到底成立せぬことである、故に都會は是非とも農業に依つて養はれねばならぬのである。

以上述ぶるが如く、都會は農業のお蔭を蒙つて居るなれば、都會の人と農業は田舎の仕事とあつて、都會は没交渉であると對岸の火災視せずして、農業の發展には田舎に於けると同じく多大の興味を持たんことを希望するのである。

是れ奮闘的青年の一大問題

一切の物皆悉く成功を欲す

成功、これ即ち現代の流行語となつて居るのであつて、今日の人々は少年と青年と壯年者とを問ふの要なし、總て皆是れ仔々吸々として成功に努力して居るのである、如何にして成功せんか是れ即ち現代に於ける大問題とする處であつて、夢寐にも此の問題を忘るゝことなく、自ら最善とする所に向つて勇往邁進する有様は、實に其の壯烈と云はんか痛快と云はんか、寧ろ

物凄きものがあるのである。

果して然らば所謂成功とは何であるか、一言以てそれを蔽へば即ち自ら大ならんとするの意に外ならぬのである、大なる政治家になり、大なる實業家となり、大なる學者となり、大なる農業者となり、大なる宗教家となる、是れ即ち成功とも稱すべきものであつて、今日の人々が成功に務めつゝあるも、皆斯くの如くたらんと欲するのである。

斯くの如きが即ち成功の意味であるならば、成功を欲するものは實に現代の人々のみでなく、度に於ては或は大小強弱の差

はあるとは云へど、古人も亦同じく成功を欲して、爲めに奮闘し努力を費した處であつて、古往今來人として成功を欲しないものはないのである、而も廣きに亘つて觀察したならば、宇宙間に存在する一切の物、礦物植物に至る迄も成功を欲して居るのであつて、宇宙その者すらも成功を欲し、成功の途を歩みつゝ、あるを發見することが出来るのであらう。

天地開闢の昔混々沌々方物することの出来なかつた大雲の狀態を脱して、天は日月星震の整然たる運行となり、地には花咲き鳥歌ふ現時の大觀を成すに至つた此の宇宙か、頑冥なる物質

的存在であるか、靈智なる精神的存在であるかは、之を哲學者宗教家の檢討に委するにして、兎に角斯の如き進化を演し來つたことは事實である、進化とは何か不完全より完全に進み、不秩序より秩序に進み、不精美より精美に進むの意味ではないか即ち成功に向つて進行しつゝ、あるのではないか。

若し夫れ彼の動物や植物が自己の存在を安固にし、同類同族の繁殖に努力するの大なることは、實に其の驚嘆すべきものであるのであつて、人間とそれと少しも異なる處がないのである亦これ成功を欲しつゝ、あるものと見るべきではあるまいか。

□ 自ら大ならんとするの慾望

自ら大ならんとするの慾望、人としてこれなき者はないのであつて、此の慾望たる實に人間の本性である、自然に依つて備へられたる自性であるのである、而も此の慾望には限りなく人間の自然性にはその飽くことを知らぬのである、求めて、而して求める、これを人慾の無限と稱するのである。

昔マセドンの大王歴山翁は東征西伐の極馬を進めてインタス河畔に至り、従者が其の地の正に世界の境なることを告げた、

彼は嗚呼世界復た征すべきの地はないかと、愁然として面を曇らし長嘆大息したといふことである、一見驚くべきことの如くであるとはいへ、其の實少しも驚くには足らぬのであつた、彼の尾張中村の一農家より身を起して、天下を一統した豊大閣は更らに朝鮮より明國までも手を延した、幼時を今川氏の人質に送り、後年關東八州の主となつた徳川家康は、終には日本六十余州の主たらんと努めた、彼等は畢竟するに人慾の無限を証明するに過ぎぬのであつて斯くの如き大慾望は、獨り彼等の専有する處でなく何人の心中にも横つて居る處である。